

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 76

NO. 76

ISSN 1346-0382

第9回 SGRAチャイナ・フォーラム

日中200年 ——文化史からの再検討

中文版

第9届 SGRA中国论坛

中日200年——从文化史进行再探讨

第9回 SGRA チャイナ・フォーラム

日中200年 文化史からの再検討

■ フォーラムの趣旨

従来、東アジアの歴史を語る時、ほとんどの識者が古代の交流史と対比して、近代の抗争史を強調し、両者の間に一つの断絶を見出そうとしてきた。たしかに政治、外交だけに目を向ければ、日中、日韓などの間に戦争も含む数多くの対抗や対立が頻発し、ほとんど正常な隣国関係を築くことができなかった。しかし、もしこの間の3国間の文化的交流、往来の足跡を精査すれば、そこには近代以前とは比べられないほど多彩多様な事実、事象が存在していることに気付くだろう。そしてその多くはいずれも西洋という強烈な「他者」を相手に、いかに互いの成果、経験、また教訓を利用しながら、その文化、文明的諸要素の吸収、受容に励む努力の跡にほかならない。その意味で、東アジア、とりわけ日中韓3国はまぎれもなく古来の文化圏と違う形で西洋受容を中心とする一つの近代文化圏を形成していたのである。

また、従来、日本にせよ、中国にせよ、その歩んできた歴史を振り返る際に、往々にして周辺との関係を軽視し、あたかも単独で自らのすべてを作り出したかのような傾向も存在している。これはあきらかに近代以降のいわゆる国民国家という枠組みの中で成立したナショナリズムに由来する一国主義のもたらした影響である。ところが、多くの古代、近代の史実が示したように、純粋な国風文化がそもそも「神話」に過ぎず、われわれはつねに他者との関係の中で「自分」そして「自分」の文化を形作ってきたのである。近代日本にとって、この他者は、むしろまず西洋という存在になるが、ともにその受容の道程を歩んだもう一つの他者 中国や韓国も当然無視すべきではないだろう。

そして、昨今、とりわけ日中の中にさまざまな摩擦が生じる時に、よく両国の「文化」の違いが強調され、その文化の差異に相互の「不理解」の原因を探ろうとする動向も見られる。しかし、これもきわめて単純な思考と言わざるを得ない。文化にはたしかに変わらない一部の古層があるが、つねに歴史性を持ち、時代に応じて流動的に変化する側面も存在する。したがって共通する大事な歴史的体験を無視し、文化の差異ばかりを強調するのはいささかも生産的ではなく、結局は自らを袋小路に追い込むことにしかならない。

以上に鑑み、本フォーラムでは、いわば在来の一国主義史観、文化相互不理解論などの弊害を修正し、過去の近代東アジア文化圏、文化共同体の存在を振り返りながら、その経験と教訓を未来にむけていかに生かすべきかについて検討し、皆さんとともにその可能性を探ってみたい。

(参考文献：劉建輝著『増補・魔都上海 日本知識人の「近代」体験』2010年、同『日中二百年 支え合う近代』2012年)

フォーラムの経緯

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)は、2007年より、日本の民間人による公益活動を紹介するSGRAチャイナ・フォーラムを、北京をはじめとする中国各地の大学等で毎年開催してきた。2014年の第8回からは、今までと趣向を変え、清華東亜文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象として開催している。

第9回SGRAチャイナ・フォーラム「日中200年 文化史からの再検討」は2015年11月20日(金)に内蒙古大学蒙古学学院で、11月22日(日)に北京大学外国語学院で開催された。本レポートは北京大学のフォーラムの講演録である。

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留學生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ (www.aisf.or.jp/sgra/) をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

日中200年 文化史からの再検討

日時	2015年11月22日(日)
会場	北京大学外国語学院新館501会議室
主催	渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
共催	清華東亜文化講座
助成	国際交流基金北京日本文化センター
協力	北京大学日本語文化学部
司会	孫建軍 (北京大学日本語学科准教授)
開幕挨拶	孫華 (北京大学元培学院教授) 吉川竹二 (国際交流基金北京日本文化センター主任)

【講演】 日中200年 文化史からの再検討 4

劉建輝 (国際日本文化研究センター教授)

討論 26

モデレーター	王中忱 (清華大学中国文学科教授)
討論者	王京 (北京大学日本語学科准教授) 劉曉峰 (清華大学歴史学科教授) 王成 (清華大学外国語学部教授) 董炳月 (中国社会科学院文学研究所教授)

講師略歴 36

あとがきにかえて 37

孫建軍 (北京大学日本語学科准教授)
娜荷芽 (内蒙古大学蒙古歴史学科准教授)

講演

日中200年 文化史からの再検討

劉建輝

国際日本文化研究センター教授



ご紹介に預かりました、劉建輝と申します。今回北京大学に戻り、演壇に立つことができ、大変うれしく、光栄に思います。孫華教授、吉川所長、今西様、そして今回の座談会を合同で開催して下さった清華東亜文化講座にまずお礼を申し上げます。同時通訳が付くということですので、簡単な日本語原稿を事前に用意いたしました。固有名詞や地名などを聞いて分からない場合は、お手数ですが、原稿をご参照ください。では、ここ数年の、私の研究成果をこれから皆さんとシェアさせていただきます。特にコメンテータの皆さんからのご意見と交流を心より望んでおりますので、よろしく願いいたします。1時間を目安にしてお話をさせていただくつもりでございます。

問題提起

まず、なぜ私がこの研究をしたのか、そしてこの研究をする目的とは何か、についてお話ししたいと思います。今日、特に歴史学界においては、開放的な歴史は主にナショナリズムと近代主義との束縛から解放されているとよく指摘されています。私たちの歴史研究をめぐる思考と記述もこの二つの束縛に左右されてきました。ナショナリズムは一つの国家や民族を叙述の対象とする一方、近代主義は西洋を中心に記述することから、両者のずれが生じてきます。つまり、一国史観は、一つの国家を単位とすることで、他国との関係が切り離された立場です。このような枠組の中で、中国文学史、日本文学史といった文学や文化史が生まれました。しかし歴史的現場に戻れば、歴史の真実はむしろそうではありません。本当は他国との関係を切り離し、完全にその国にしか属さない歴史はどの国にも存在していません。

私たちがもし東アジアの中国、日本、韓国、ベトナム、モンゴルに目を向ければ、これらの国々は古代から現代に至るまで相互に影響し合っていることが分かります。これらの国々の古代史はお互いに不可分な関係を持っていますが、近代においてはこの地域の歴史は抗戦史と見なされています。もし私たちがよりマクロな視点で、東アジアにおける西洋化という大きな歴史的環境を設定するとき、上述の東アジアの国々は、お互いに参考にしあい、支え合い、共に大きな文化転

換を成し遂げた事実が見られます。このような全体的な文脈において、東アジアの国々は外来文化の衝撃を受容し、また変容させてきました。そのため、私は200年という期間、また東アジアという地域の枠組みを設定し、これまでの独立した一国の歴史を解体することによって、今までの束縛から解放させ、歴史の真実を探ります。私自身は日中交流を課題にしておりますので、中韓、中越の問題は研究対象としておらず、あくまで中日を中心に研究を進めております。

では、なぜ日中200年なのかを簡単に紹介させていただきます。これまで私たちが語る近代史とは、中国のアヘン戦争と日本の明治維新を起点にしているものでした。これは外交史、軍事史、制度史、世界史の観点から、特定の国を中心に独立的な分析を行ってきた記述です。もし東アジアにおける西洋化という要素を合わせて考えてみれば、東アジアにおける近代史の始まりは実は先に述べた歴史的出来事よりもっと早かったのです。

18世紀末における外交の変化を東アジアにおける近代の起点と捉える学者もいますが、私は主に文化的な視点から、東アジアの近代化は、1810年前後に始まったと考えています。1810年頃から東アジアは西洋文化を本格的に受け入れ始めました。無論、中国明末時期における宣教師の渡来や日本の南蛮文化はありましたが、決定的な画期となったのは1810年頃でした。その時、二つ要素が現れてきました。一つは個人貿易としての資本主義です。もう一つ重要な要素は、近代的な思考を可能にした概念です。私たちが西洋の概念で物事を考え始めたことで、政治経済に大きな変化を与えました。その後の200年は、西洋文化を共通的に受容する200年でした。主権を争う戦争がその後起こったにも関わらず、私たちは西洋文化を受容する点でお互いに参照し合ってきました。

この200年をマクロな視点から眺めると、最初の100年間において、中華帝国は西洋の衝撃を受け、徐々に瓦解し、辛亥革命を経て徹底的に崩壊したのに対し、日本においては、19世紀半ばから20世紀中期までの100年間、まさしく台頭する時期です。この時期に二つの帝国文化が混在していて、文化主導権も両者の力関係の中で決定されました。そこから、中国の周辺地域の文化に対する清帝国としての影響力が見られます。当時、広州、上海から日本へ、また日本から逆輸入という流れがあり、そして帝国から国民国家へという回流も成され、お互いに大きな相互作用が見られます。日本帝国の地域内では、例えば東北、広州、上海、内モンゴル、朝鮮半島や台湾など、帝国文化圏での文化交流があります。私の研究はこれらの問題にも触れますが、今日は、東アジアがなぜお互いに支えられていたのかを、以下6つの領域における代表的な現象から説明させていただきます。

ここでまず、固有文化や文化「古層」を解体したいと思います。中国や日本は自ら独自性を持っているので、お互いに理解できないことも不思議ではないと思う人が多いかもしれませんが、これは特定の文化の独自性を強調しすぎた結果です。文化が多元的であることを我々は知っていますから、固有文化、また日本文化の「古層」という独立的、単一的な存在はあり得ないのです。この古層は本物なのかということを再考すべきだと思います。

近代的ナショナリズムの中で、日本の民俗学や歴史学など多くの学問が生まれ

ました。それはいずれも日本の近代的な国民国家やナショナリズムの枠組みの中で形成されたものです。民俗学では「日本文化の古層」という概念を頻繁に使っていますが、一部の日本人学者が求めようとしている古層は、必ずしも日本文化の真の古層ではなく、この形成過程には中国からの影響がたくさんあります。日本文化の研究者が知っているように、日本文化には二つの源があります。日本古典文学はよく唐代をまず語り、次に天竺、最後に本土について語ります。このように、日本古代にあった複眼的で多層的な認識の視座と方法は、近代になると逆に削られてしまいました。

現在、日本文学の中で国風文学が強調され、中国でも国学が語られるように、これらの文化は現地でしか生まれることができないということになっています。しかし、北京大学の嚴紹盪先生の研究によると、『古事記』の最初のシーンはすでに中国文化の要素を含んでいます。二柱の神様が天から降りてきて、結合したことで日本列島が形成されたと書かれていますが、最初の結合は失敗しました。女性が右側にいて先に話しかけましたが、彼らは天にどうしたらいいかを聞きました。天は「あなたたちは立場を逆にして、男は右側に行って先に話をすればよい」と答えました。このようにして日本列島が無事に生まれました。当時日本の天皇は女性で、男性が主導権を握るのは大陸や中国文化にしかないところから、その影響関係が見られます。中国人は「左遷」と言いますが、左は下位で、右は上位、男を上にするのは明らかに中国文化の考え方です。『古事記』の最初の場面からすでに影響がみられることから、中国文化とのつながりは切り離せないものだと言えます。無論、後の漢朝、隋朝、唐代において、東アジアの中では文化共同体が形成されたことはよく知られています。

しかし、私が今日ここで強調したいのは、近代に入ってから、この共同体は依然として存在しているということです。漢文や仏教などの伝来により、日本と中国には文化共同体が形成されましたが、私が明らかにしたいのはこの文化共同体は近代にも継続しているということです。ここでは、アジアの近代史は抗争しかない抗戦史であるという従来の見方を修正したいと思います。近代は抗争だけでなく交流もあります。もしこの問題をより大きな文脈で考えれば、それは西洋文化を共に受容する歴史であり、受容史の問題となります。

【1】概念

まず概念から始めます。古今を問わず人間が問題を考える際によく「概念」を使います。概念は長い時間を経て徐々に形成されるものです。中国における概念の最も大きな転換は1810年の広州十三行においてです。広州十三行は、現在の特区のような貿易拠点です。ここを訪ねてきた宣教師が辞書を編纂し、聖書を翻訳することで、文化的な転換をもたらしました。当時、広州十三行でロバート・モリソン（Robert Morrison）という宣教師が様々な布教活動を行いました。これが文化の転換点であると考えられます。

モリソンの影響で、4つの主な辞典、英華辞典が出版されたことは、私たちの概念に対する考え方に影響を与え、蘭学者もそれに関与しています。それ以来、



図1 広州十三行商館（1840年頃）



図2 広州十三行商館（1840年頃）

概念は西洋書の漢訳や西洋の宣教師が広州で発行した新聞、雑誌を通じて日本に伝わり、明治維新に大きな影響を与えました。

日本の友人から時々質問されます。日本の明治維新は中国と関わっているのだろうか。明治維新は主にオランダとイギリスに影響されたのではないか。実は、当時の情報の多くは上海から伝わってきており、日本近代史に見られる欠点の一つは、中国との関係を排除し、西洋との密接な接触を脱亜入欧の特色としていることです。オランダとの関係を強調した結果、上海との関係が抹殺されました。この時期についての歴史の記述では、古代日本は中華文化圏の国で、近代に入ってから西洋文化圏、近代的国家に転換したとされています。

しかし実際はそうではなく、近代においても上海が日本に大きな影響を与えたことは無視できず、日本と西洋の間にある中国という存在は日本の文化的転換に大きな役割を果たしていました。当時、日本の武士や官僚たちは、中国に滞在した宣教師が唱えた「概念」を受け入れ、自国の近代化を推進しました。20世紀に入ると、梁啓超らがそれを中国に逆輸入し、1910年前後に中国も近代をめぐる思考を形成し始めるようになりました。日清戦争前後においてまだ翻訳に関する多くの議論があり、戦争が終わった頃にやっと概念が定着しました。

このプロセスは非常に興味深いもので、日本でしか成し遂げることができませんでした。なぜなら、当時の中国知識人達にとっては、従来の概念に対する自己否定はとても困難なものであり、その受容をめぐる様々な排斥運動が展開されましたが、日清戦争の敗戦を経てそれらの概念が徐々に受け入れられるようになりました。そのため、西洋に由来するこれらの概念は、中国から日本へ伝わり、また中国に戻るといった「旅」を経験しました。私たちが現在使っている日本から受け取ったこれらの概念の造語の6、7割は、このような「旅」をしたものです。私はこの現象を「言語間の旅」と呼んでいます。

図1と図2は広州の西南方に位置する十三行で、これらの建物は非常にきれいです。ここは清朝が西洋に開放した唯一の貿易窓口です。広州では、十三行は一般的には租界と呼ばれていませんが、私は個人的にこれを租界と見なす立場です。当時ここに13軒の大きな対外窓口があり、図にはイギリス、フランス、デンマーク、オーストリアなどの商館が描かれています。図の縦方向に奥深い雰囲気の大通りがあり、大通りの両側にある商店は外国と貿易をしていました。

実際、清朝の対外貿易には主に、広州対西洋、寧波対日本と琉球、張家口対ロシアの3つがありました。商人ごとに活動する地域も違います。例えば、西北地方の商人は張家口、福建商人は十三行、浙江省と江蘇省の商人は寧波で活動していました。これまで、私たちにはこのような研究の視点が欠けていましたが、この3つの大きな拠点における貿易状況を分析すれば、当時の経済構造がより明確に見えてくるはずです。

次に広州十三行の由来を紹介させていただきたいと思います。清朝乾隆帝が在位している時期から、広州十三行はすでに大貿易港となり、主に西洋各国の政府と中国政府主導の貿易取引を行う公的な施設でした。言い換えれば、この時期の貿易が国家独占体制という形をとっていたことは、非常に重要だと思います。中国は100年以上前にこの貿易体制を取り入れ、200年近くの間この政府独占体制が絶えずに強化されてきました。

18世紀の終わりには大きな変化が起きました。イギリス国内では資本主義が発展し、政府のみならず個人も対中貿易を行うことが提案され、こうした市民の要請により英国議会は東インド会社の独占体制を廃止しました。また現在でも同様ですが、イギリス国内のスコットランド商人とイングランド商人は違っていました。この時期にスコットランド商人が外国との貿易を考え始め、多くの商人が中国に来ました。このように、東インド会社のインドと広州における独占権問題が浮上しました。

要するに、19世紀初頭におけるイギリス国内のこうした事情により、多くの個人商人が中国を訪ねてきました。またもう一つ重要な要因はアメリカ人の出現です。独立戦争を経て経済が回復した後、東インド会社のような政府貿易会社がないため、数多くのアメリカ商人が中国にやってきます。中国のお茶、シルク、磁器の貿易は非常に儲かる商売ですので、アメリカの商人たちはこの市場をイギリス人に独占させたくなかったのです。

この様な経緯で、国同士の貿易体制が崩壊し、数百人を超える個人商人が出現しました。例えば、1837年には150社以上の個人商社が設立されました。この場合、相手が個人であるため、これに対応してこちら側にも個人が出現しました。いわゆる行外商人です。これまでは、皇帝が任命した商社しかありませんでした。皇帝の許可を得て対外貿易を独占することが認められ、その結果彼らは対外貿易から膨大な利益を得て一気に大富豪になりました。清政府に認められた十三行の商人の中で、最も成功した人は世界富豪ランキングに入り、アメリカに投資した人もいます。

時代の変化に伴い、広州の15,000平米弱の面積の地域に、200軒以上の行外商人が出現しました。行外商人は皇帝の許可を得てないため、清朝正史に記録されていません。また当時300人以上の外国人が広州に住んでいました。当時の法律によれば、外国商人は現地に数ヶ月しか滞在できず、商売を終えたら直ちに帰国しなければならない。それ以上の滞在は許されません。しかし、事実はそのようではありませんでした。ですから、制度に関する歴史のみに注目してはいけません。制度史には、文化史の中の些細に見えることに基づいて研究を補完する必要があります。



図3 ジャーディン(左)とマセソン(右)

行外商人は増え続け、貿易額も増加し、1820年にはその貿易額が行商よりも多いという逆転が起きました。銀行が設立され、貿易がさらに盛んになり、その後アヘン戦争が勃発しました。こうした貿易の内実の変化が、アヘン戦争の本当の原因です。歴史研究はこのような文化の細部から探る必要があります。そしてこの頃から近代が始まったといえます。

当時最大の貿易商社はジャーディン(Jardine)とマセソン(Matheson)(図3)が開設したジャーディン・マセソン洋行で、現在は世界的大商社です。彼らの商売には不動産や金融業も含まれています。当初、中国好きな2人のスコットランドの若者が、西洋時計を持って中国に貿易をしに来ました。これが結果的に、当時の官僚貿易体制を覆すことになりました。また、もう数軒の洋行もアヘン商売をしていました。簡単に言ってしまうと、官僚貿易体制を根本的に覆したのはこれらの人たちです。

一方、キリスト教の伝来は中国に大きな衝撃を与え、新しい概念の形成を促しました(図4)。中国に滞在していたプロテスタント宣教師たちは、様々な小冊子を印刷したり配布したりしました。本来、彼らは広州市内に入れませんが、皇帝はそこまで手が回らないので、地方の官僚たちに多少賄賂を渡せば、毎年広州に入って宣伝小冊子などを配布することができました。彼らは毎年科挙試験を受ける受験生たちに小冊子を配布しましたが、受験生たちが宗教にどれだけ興味を持っていたかは分かりません。ただ、落第した人たちは心理的な重圧から逃れようとして、それを見て癒されたであろうことも想像できます。洪秀全もこのような人の中の一人です。彼は、最初はキリスト教にあまり関心を持っていませんでしたが、十数年に渡って何回も科挙に落ちたことから、これらの小冊子を見てふと自分がイエスの弟だとひらめき、太平天国運動を起こしました。このように、キリスト教は中国へ少しずつ浸透していき、天地をひっくり返すような役割を果たしたことがわかります。

十三行について歴史学界ではこれを租界とは呼んでいませんが、私は租界と見做しています。実際、ここは小さな租界としてイギリス、フランス、アメリカ、オーストリア、デンマークなど13軒の洋行と3つの路地があり、その中に中国と

図4 広州と南洋のキリスト教プロテスタント布教者の活動一覧(1807～1842)

1807	馬礼遜(モリソン)来華
1813	「新約聖書」漢訳完成(馬礼遜)
1813	米憐(ミルン)来華
1815	「察世俗毎月統記傳」(中文)発行
1815～1823	「華英字典」完成(馬礼遜)
1817	麦都思(メドハースト)、馬六甲(マラッカ)到着
1818	英華書院創設(馬六甲、1843年に香港移転)
1823	「特選撮要毎月紀傳(中文)」巴達維亞(バタヴィア)にて創刊(麦都思)
1823	「旧約聖書」漢訳完成(馬礼遜・米憐)
1827	「廣州記録報」(英文)創刊
1827	郭実獺(ギュツラフ)巴達維亞到着
1828	「天下新聞」(麦都思)在馬六甲創刊
1830	裨治文(ブリッジマン)来華
1830	「中国叢報」(The Chinese Repository、英文)創刊(裨治文)
1830	「在華基督教協会」創立
1833	「東西洋考毎月統記傳」(中国語)創刊(郭実獺)
1833	衛三畏(ウィリアムズ)来華
1834	公理会(会衆派教会)廣州印刷所創設
1834	郭実獺夫人、澳門に女学堂を創設
1834	廣州在住外国人「在華実用知識伝播会」成立
1834	伯駕(パーカー)来華
1835	十三行にて眼科医局開設(伯駕)
1835	石版印刷伝来(衛三畏)
1836	「馬礼遜教育会」成立
1837	モリソン号来日(郭実獺、衛三畏、伯駕)
1838	「各国消息(中文)」創刊(麦都思)
1838	鉛漢字(後に「香港フォント」と呼ばれる)新嘉坡にて完成
1838	「中華医薬傳教会」成立
1839	馬礼遜学堂(モリソン学校)成立(澳門)
1839	「澳門新聞報」「澳門月報」(林則徐)創刊
1840	「伊索(イソップ)寓言82編」漢訳(羅伯聃口バート・トーム)
1842	「馬礼遜学堂」香港移転

外国の貿易商人がいました。最も大きな貿易商社は例の「怡和洋行(ジャーディン・マセソン)」です。上述の二人のスコットランド商人はまず中国人に時計を売って、徐々に発展していき、最終的には当時の官商体制を覆しました。もう一つの大きな貿易商社は「顛地洋行(デント商会)」です。アヘンの商売は非常に儲かるため、アヘン貿易に参加していました。

モリソンは1807年に中国に来て、聖書の翻訳、雑誌の創刊、南洋地域における学校の創立に力を入れていました。プロテスタントの宣教師は中国人や華僑を対象に医療や教育活動を行うことが一般的であり、その後布教活動のための印刷

図5 モリソンと翻訳助手

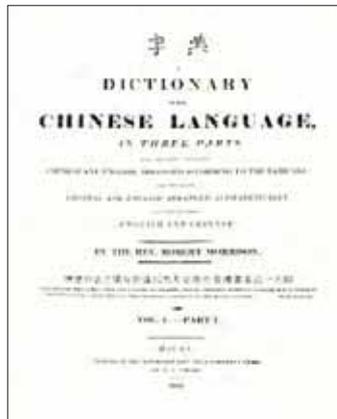


図6 辞書の表紙

Action 行為、Apostle 使徒、Code 律例、College 書院、Comedian 戲子、Commerce 貿易、Communicate 相通、Company 公司、Compare 比較、Exchange 交換、Judge 審判、Law 法律、Language 言語、Lawyers 訟師、Level 水準、Library 書房、Life 生命、Logos 道、Love 愛、愛恋、Luck 好運、Manage 管理、Manifest 表著、Manner 礼貌、Natural 自然的、News 新聞、Note 記録、Novel 小説書、Men 人類、Opera 戲曲、People 百姓、Prosecute 告訟、Reasonable 合道理、Religion 教門、School 学堂、Shortsighted 近視眼、Smile 微笑、Spirit 精神、Tragedy 悲劇、Translate 翻譯、Travel 遊学、Unit 单位、World 天下、世界

図7 『英華字典』における翻訳語の例

所も創設され、廣州十三行にも印刷所がありました。これらの印刷所は英語教育を含む教育活動や布教活動の拠点となっていました。

また、彼らは病院も創立しました。例えば有名なのが十三行眼科病院です。その後発展し続け、アヘン戦争後に広州市内に引っ越し、博濟病院になりました。この博濟病院が19世紀末に学校を創立し、孫中山はここを卒業しました。この様に、小さな十三行が、中国、ひいては東アジアの近代史の口火を切ったことが窺えます。

モリソンが編集した数篇の辞書は、いずれも大きな役割を果たしていました。その中でも最も重要な辞書は『英華字典』だと思います(図5・図6・図7)。彼は『英華字典』を編纂するために数人の中国人を雇用しました。これまで日本では英語を勉強したい場合、オランダ語を通じて勉強するしかありませんでしたが、この辞書が1828年に日本に伝わり、日本人は中国語を通じて英語を読めるようになりました。日本人は漢文が読めるため、英語学習も便利になり、英学の発展が促進されました。この様に、これらの辞書、特に『英華字典』は日本に大きな役割を果たしました。モリソンは英語から概念を翻訳しており、書院、貿

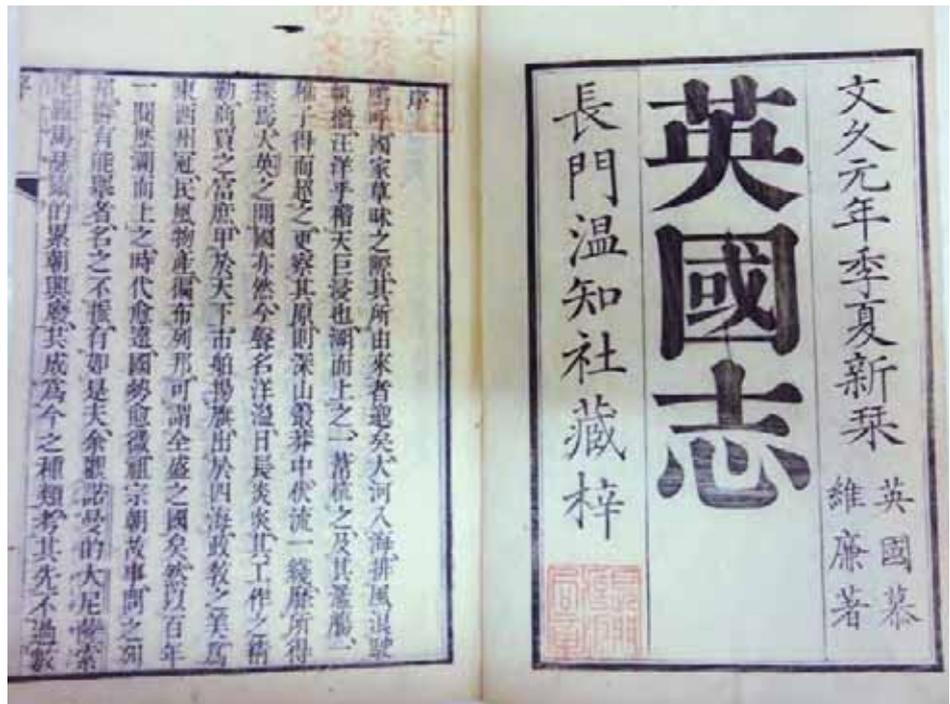


図8 長州藩が翻訳した『英国志』

易、会社、法律などの概念が今でも使われています。また、「恋愛（愛恋）」や「小説」、「劇（戯曲）」などの言葉も先駆的で、日本に伝わってから日本の知識人たちの概念をめぐる翻訳と理解に非常に大きな役割を果たしました。

1844年にウィリアムズ（Samuel Wells Williams）の辞典、1847年にメドハースト（Walter Henry Medhurst）の辞典などが刊行され、1868年の明治維新前にはすでに4つの大きな辞典があり、これらは全て日本に輸入されました。ここでは雑誌の輸入には言及していませんが、こちらも日本人が西洋概念を理解する過程において重要な役割を果たしたものです。概念の転換をどんなに強調してもしすぎることはないと思います。

これら十三行を含む大部分の機関は、1840年のアヘン戦争後、ほとんど上海に引っ越しました。上海は地理的な優位性があるだけでなく、日本に近いことも重要であり、またその背後には長い歴史を持つ江南地域の文化もあって、宣教師たちが次々と上海へ赴くようになりました。またこれは資本の行方とも関係しており、大量の資本も広州から上海へ移動しました。貿易上必要とされるシルク、茶葉などは上海の周辺にあったからです。それまでは、各地の生産物を一つ一つ広州に持って行って、現地で加工しなければなりませんでした。アヘン戦争後、上海で貿易ビジネスが全て完結できるようになりました。

上海には買弁層（欧米列強（銀行や商社）の対中進出や貿易を支援した中国人商人）も形成されました。宣教師、資本と買弁の行方は関連しています。買弁は外国人のために業務を行い、彼らも資本と同じく、広州から上海へ、また上海から日本へと移動しています。

上海で出版された宣教師の書籍も輸出品とともに日本に輸入されました。そし

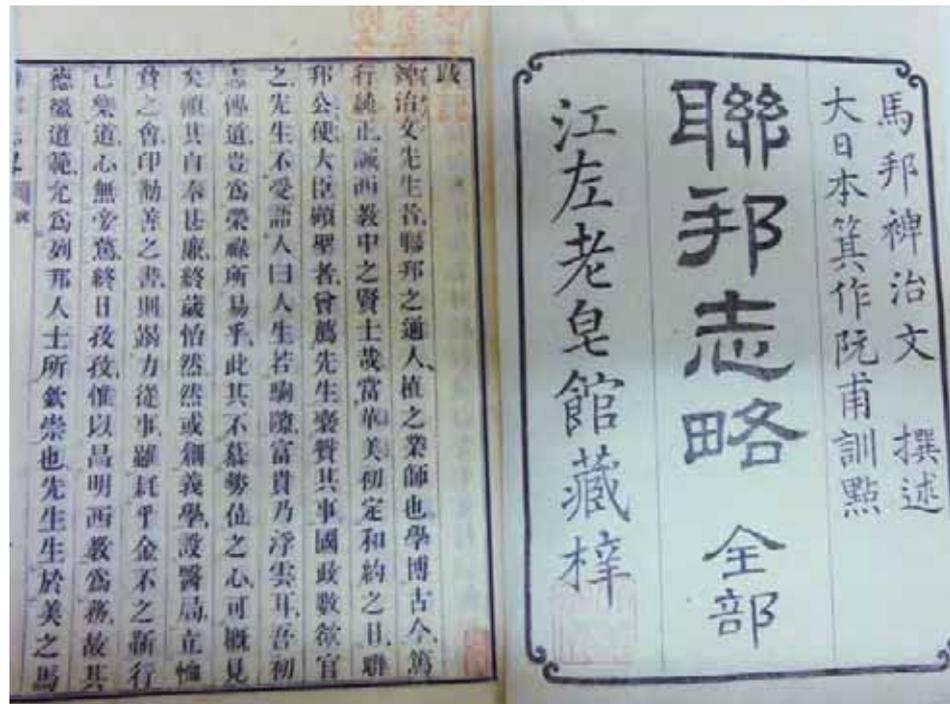


図9 禪治文の『連邦志略』

て書籍の伝播がその後の日本に極めて重要な影響を与えています。例えば、長州藩が翻訳した『英国志』（図8）がイギリス史で、禪治文（ブリッジマン/Elijah C. Bridgman）の『連邦志略』（図9）がアメリカ史となっています。

実際、買弁の一部も日本に行きました。それで、日本に中華街があるのです。これらの中華街は大抵外国人の居住区のそばにあります。これは十三行を起源としています。外国人がいれば、彼らのために業務や散髪、裁縫などをする中国人が必要となってきます。ですので中国人も資本とともに広州、上海から日本へ移動しました。

【2】言語：近代日本における文体の形成

書物だけでなく、宣教師の文体も重要です。彼らの文体は非常に簡明なもので、外国人として広州で白話文を学び、中国の庶民も官吏も読めるように中国語を簡明にしました。この漢文は四書五經にあるような漢文ではなく、彼らが解体・簡明化した漢文です。このように簡明化された漢文が日本に伝わってきて、日本の明治維新に大きな影響を与えました。明治初期における多くの漢文は、このような解体・簡明化された宣教師の漢文であるため、近代日本における文体形成の問題を再考する必要があります。近代日本における文体の形成は、宣教師たちの漢文の影響を受けて形成された部分があります。言語学者に反論されるかもしれませんが、私は文化史的な立場からこのように指摘したいと思います。

これは広州と上海時代に遡る必要がありますが、宣教師たちが出版した漢訳洋書に関わっています。それらの本の斬新な内容から、明治期の知識人たちは多く

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
 徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
 ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
 ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
 ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
 相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
 ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器
 ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
 ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
 シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
 ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
 爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
 臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
 ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
 拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
 明治二十三年十月三十日
 御名御璽

図10 教育勅語

の情報を得ることができ、彼らの間で人気を博しました。そして次のような現象が現れるようになりました。幕末から明治初期までの間、紀行や日記の多くは漢文で書かれていましたが、それはこれまでの歴史、特に江戸時代とは異なります。江戸時代において、漢文は教養であり、知識人は漢文で交流していましたが、明治時代に入ると漢文は実学となり標準文体となりました。この時期の漢文体はルネサンスのような復興が見られ、近代日本語の母体となり、公的な役割を持ち、下層まで浸透され、新しい漢学を形成しました。

例を挙げると、図10は明治天皇が發布した教育規範の『教育勅語』です。ご覧ください。日本語が読めなくても構いません。仮名を抜いて、語順を調整すれば、中国人は読めるはずです。この文章は漢文で書かれており、標準的な文体です。

しかし、江戸時代に使われていた候文は、文字は漢字ですが、語順は日本語の順序で、日本語の文法によって構成されているため、(中国人には)ほとんど読むことができず、理解できません(図11)。当時の幕府が公布する通知は、この文体を使用しています。この江戸時代の共通の文体は明治時代において否定されました。

例を挙げると、当時有名な知識人である高杉晋作が上海に来て、紀行の見聞を漢文で記述しました。この時期の彼の紀行文は、全て漢文で書かれています。「上海滞在日記。五月七日、払暁…」云々(図12)、中国人は日本語が読めなくても、中国語として読めば読めます。旅行記も記録も、彼は全部漢文を使っています。

もう一つの例は、幕末の外交官である成島柳北です。彼は幕末期に外務大臣を務めていましたが、明治期に職を辞して各地に旅をしていました。彼はヨーロッパへの旅行を『航西日乗』で記録し、同じく漢文で書いています。森鷗外も漢文

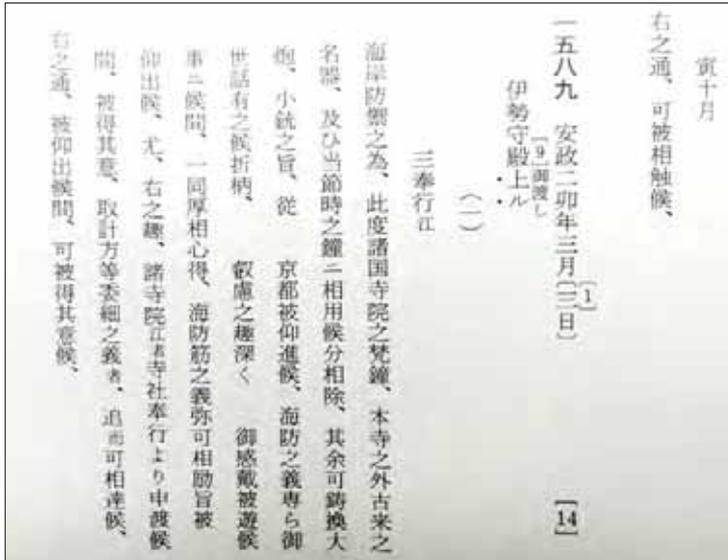


図 11 江戸時代における公用文の文体 候文（幕府告示 - 御触）

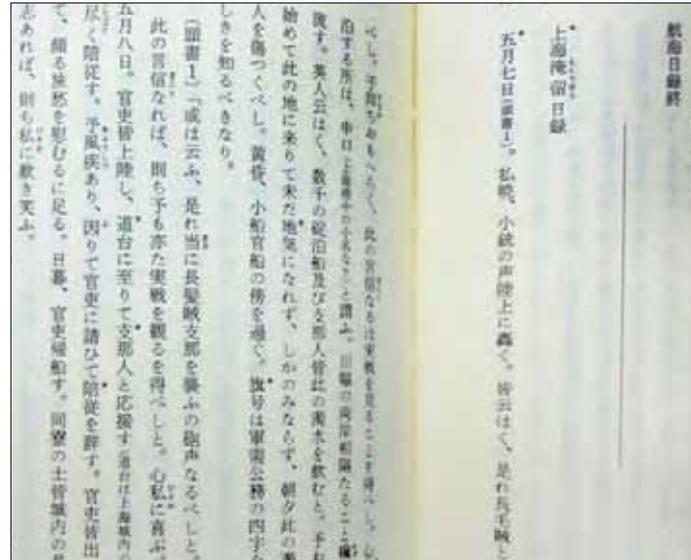


図 12 幕末維新时期における紀行文・日記の文体（高杉晋作、1862年）

で『航西日記』を書き、福沢諭吉も「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という名句を書きましたが、これも漢文体によるものです。

漢文体の簡略化によって現在の日本の文体が形成されました。私は日本の文体が漢文から来たものとして日本文化を否定しているのではなく、日本語は中国語（漢文）を母体の一部にしていると言えると思います。日本へ留学した経験のある方は、日本の医学書、法律書、軍隊用語をご覧ください。これらの本に使われている文体も漢文体ですので、先のような結論になります。すべてを漢文で書く理由は、彼らが輸入してきたこの種類の本に最も関心を持っていたからです。例えば法律界の「六法全書」も基本的に漢文体で書かれています。このことはとても重要だと思います。何故このような現象が起きたのでしょうか。それは、日本人が漢文を叙事機能、論理性、構造的性を持っている文体だと考え、漢文を使うことで新しい言葉を造りやすく、また漢文には豊富な故事と既成概念があるからです。

いくつかの例を簡単に挙げます。当時の評論家の一人は「和文は漢文と比較することができない。比較すれば、その巧拙、細粗、精巧の差が一目で分かる」と言いました。ご存知のように、中村敬宇も「洋学を学ぶには必ず漢学を先に学び、漢学を学んでから洋学を学ぶほうが効果的だ」と言い、漢学を廃止することはできないと強調しました。それゆえ、洋学は漢学の風に乗って来日したと言えます。

その後梁啓超らは政治小説を翻訳し、日本語速読法を広めることによって、この明治の漢文体をまた中国に逆輸入しました。つまり、中国の古代漢文は宣教師たちによる解体、日本人による解体と再建という二重の手続きを経て、再び中国に輸入され、清末期の新しい文体を形成することになります。

日本から中国へ逆輸入された新しい概念と文体が、また五四運動の文体改革を

促しました。「文体の旅」が如何に重要かは、五四運動の白話文が果たした役割からも伺えます。語彙間の旅と文体間の旅が自己否定に重要な役割を果たしていたことは両国関係の特徴です。

『変法通議』と『日本文を学ぶ益を論ず』の中で、梁啓超が何故新しい文体を提唱し、日本語を学ぶ必要があると主張するのかを書いています。梁啓超は、日本語を理解したいなら、仮名を抜いて読めばいいので、十日間あれば十分と豪語しました。

彼はまた数多くの政治小説を翻訳しました。今日の研究によれば、それらは全部彼が翻訳したものではないとされていますが、少なくとも彼の名義で出版していることは事実です。原著と訳本を比較してみますと、仮名を除けば、この二つの文章はほとんど相違がありません。もちろん、語順の変化はありますが、彼はこのように翻訳したわけですから、これが中国に輸入されてきて、新しい文体の誕生に大きな役割を果たしました。

梁啓超は横浜で『新民叢報』と『清議報』を創刊してこの文体を唱え、また『清代学術概論』の結末に、「学者は争って真似をし、それを新しい文体と号す」と書きました。日本の新しい文体を中国に持ち込んだことは、彼の大きな貢献だと言えます。

【3】自己認識

次に自己認識についてお話しします。先ほど開幕挨拶で国際交流基金北京日本文化センターの吉川先生が、中日の間に鏡が必要だと仰いました。私も古代から今日に至るまで、中国の自己認識にも日本の自己認識にも、このような鏡が必要だと感じています。自己認識の形成には確かに参照物が欠かせません。

近代中国にとって、この鏡は日本であり、中国の自己認識も日本経由で形成されてきました。

一方、近代日本は西洋を鏡にし、自分自身があらゆる面で西洋に劣っているという劣等感がずっと存在していましたが、中国と朝鮮を見ると優越感を持つようになりました。そのため、日本人は中国と韓国を疎遠にし、西洋の近代化に倣うことにしました。言い換えれば、西洋的近代化に遅れている中国や朝鮮半島と比較することで、日本人は自己を肯定する自信を得ました。これに対して、中国は日本を鏡にして自己認識し、日本を通じて自画像を描きます。中国はこの比較を通して自分がまだ沢山の問題を抱えていると気づきました。

日清戦争以降、日本の自信が増したことから、日清戦争、日露戦争の期間に多くの日本人論が出てきました。新渡戸稲造の『武士道』、岡倉天心の『茶の本』、芳賀矢一の『国民性十論』の影響は深遠なものです。その中で国民性をめぐる論述は、国家意識とか、勤勉さとか、衛生とかを説いたものが多く、それらは当時の日本の最も有力な雑誌『太陽』において、繰り返し宣伝されています。

中国人がいかに国家観が希薄で、怠惰でだらしないものか、日本人の国家観がいかに強いものかを強調します。日本は万世一系の国で、中国は最も基本的な国家概念すら知らず、国家と帝室の違い、国家と王朝の違いも分からないため、日本

こそが近代国民国家の手本だと彼らは強調しています。

そして、衛生と勤勉の観念を強調することから、日本人の五大特徴の一つである清潔を愛す性質が抽出されます。例えば、従軍記者が中国の東北に行った後、東北の汚さは言葉では表現できない程だと言い、それに比べて日本はどんなにきれいであるかを述べています。

もちろんこれには制度的な操作もありましたが、梁啓超はこれを受け入れ始め、日本に行ってから、国民性をめぐる一連の論述を発表しました。『中国積弱根源論』では、『太陽』と類似した意見も発表し、日中の違い、国家観念の違いを挙げ、中国人は「国家と天下の区別」、「国家と朝廷の区別」、「国家と国民の区別」が分からないと指摘しています。

また、彼は6つの根本的な原因を見出し、中国人を「非常に奴隷的、非常に愚か、非常に利己的、非常に偽的、非常に臆病的で、非常に無感覚的だ」と捉えています。それはいずれも雑誌『太陽』に掲載された中国を批判する言論であり、梁啓超はそれを全面的に受け入れ、著作にも反映しました。彼らは中国人を結束力のない国民だと批判していますが、日本の結束力は実は明治中期になって初めて形成されたものでした。

【4】文学

次に文学について簡単にお話しします。清末期に刊行された小説は千冊を超え、翻訳小説はその3分の2を占めています。日本語から翻訳された小説、例えば梁啓超が提唱した政治小説は、その一つの専門部類に属しています。

文学にとって、これらの翻訳小説は新しい意味を持っています。時代によって、文学創作の理念は変化しますが、最初は「文を以って道を載せる」と主張し、社会性を一番重要視していました。ここでの文は詩文を指していますが、梁啓超が活躍する近代になると、日本に影響されていた彼は小説が重要だと考え、文学における詩と小説の立場を逆転させました。

梁啓超は文学の中で小説の正統性を肯定し、西洋の主流が小説を通じて思想と内実を示すと考えていたので、それらの小説を中国語に翻訳しようとしていました。これを実行した結果、数多くの日本政治小説が中国に出現しました。

もう一つ言及したいのは五四運動です。表面的には、この運動は反帝國的な新文化運動ですが、その内実は、実は非常に親日的な立場です。その内容の大部分も日本から伝えられてきたと言えます。ここでは周作人の『人の文学』という文章について重点的に話したいと思います。この文章にはいくつかの発見があります。人間の発見、女性の発見、子供の発見と恋愛の発見です。先ほど言及したことです。彼のような留日経験のある五四知識人が日本からそれらの概念を導入し、徐々に定着させました。胡適らアメリカに留学した知識人にも、新文化運動に対する提唱がいくつかありましたが、それらを実践的に行ったのは周作人です。この場に周作人研究の専門家がいますので、後ほど更に交流できると思います。

もう一つ重要なのは階級概念です。共産党宣言を翻訳する時から既に問題としてあがっていますが、1921年に共産党が成立した後、一部の青年が階級を強

調することになり、毛沢東も階級概念で農民に対する分析を行うことになりました。文学の分野からこの問題を考えると、以下の数多くの日本プロレタリア文学作品が中国語に翻訳されていたことに注目すべきです（図13）。

1920年代後半から30年代初頭にかけて中国で
翻訳および紹介された日本のプロレタリア文学作品

（理論部分）

『文学之社会的研究方法及其活用（文学の社会的研究方法及びその適用）』平林初之輔著 林虧癸訳 太平洋書店 1928年3月

『新興文芸論』藤森成吉著 張資平訳 聯合書店 1928年12月

『文学之社会的研究』平林初之輔著 方光焘訳 大江書舗 1928年12月

『近代日本文芸論集』韓侍桁編訳 北新書局 1929年2月

（林葵末夫『文学上之個人性と階級性』、平林初之輔『民衆芸術之理論と實際（民衆芸術の理論と實際）』等を収録）

『現代新興文学的諸問題（無産階級文学の諸問題）』片上伸著 魯迅訳 大江書舗 1929年4月

『新写実主義論文集』蔵原惟人著 吳之本訳 現代書局 1930年5月

（『作為生活組織的芸術と無産階級（生活組織としての芸術と無産階級）』等を収録）

『新興芸術概論』馮憲章訳 現代書局 1930年7月

（蔵原惟人『意識形態論』、青野季吉『新興芸術概論』、小林多喜二『新興文学的大衆化と新写実主義』等を収録）

図13 階級の発現

これは日中文学の関係と発展にとって非常に重要なことです。五四運動を通じて、私たちは大正文学、特に白樺派の文化的な内実を受け入れ、肯定的な立場から人間を考えようとしていました。しかしこれらの人間の内実を掘り下げようとした時に、日本文学は急に転向され、上記の左翼文学が一気に現れ、そしてその左翼文学が大量に中国に輸入され始めました。左翼文学は主に集団や社会に注目する文学ジャンルであるのに対し、これまで伝わってきた白樺派文学は主に個人に関心を寄せる文学ジャンルです。つまり、私たちが個人の問題に関心をもち始めた時に、突然プロレタリア文学という別の潮流が流れてきたことで、私達はまた再び社会と集団に注目することになりました。

このようにして、日本との距離が作られました。日本は明治と大正時代という長い期間にわたって、自己の問題にずっと関心を持っていたため、プロレタリア文学の後も、大江健三郎、村上春樹のような文学の誕生が可能でした。一方、私たちの文学は人間の文学から左翼文学に転向したところで突然切断され、その発展に大きな断層を伴うことになりました。

なお、この時期、日本から精神的、物質的な影響もたくさん受けています。例えば内山書店です。北京外国語大学の秦剛先生の調査を借りれば、内山書店は年間8万冊の日本語書物を販売しており、その3分の2は帰国留学生たちが買っていました。白樺派文学が中国で流行する時期もそうですが、プロレタリア文学が物凄いスピードで中国に進出できたのは、内山書店などによる物質的な協力にも関係があります。郭沫若は留日中国人の役割を強調し、五四運動の大部分が留日中国人学生によって発起されたとまで言い切っていました。

【5】旅行

次に旅行のことを少し紹介したいと思います。以前南開大学に勤めていた時、旅行専攻を創立しようと主張する同僚がいて、私は大反対しました。しかし、現在私は旅行を人間の観念に大きな影響を与えられるもの、人間の審美性などに大きな衝撃を与えられるものとして考えています。

私自身の中日 200 年史観では、1900 年代頃、鉄道や鉄橋など様々な交通インフラの発展に伴い、観光システムも形成されたことになっています。従って膨大な数の人の移動がこの時期に始まり、各地に行き調査することも可能となりました。そしてその過程において、JTB という会社がたいへん重要な役割を果たしています。

ホテルなど一連の施設が整備された後、宣伝や広告、専門の旅行雑誌が誕生し、修学旅行も登場しました。当時日本の多くの修学旅行の目的地は中国と朝鮮でした。東京から下関までは鉄道で簡単に行けます。その後釜山から中国への鉄道が開通してから、奉天などの地域に行く新幹線のような快速列車も登場しました（図 14）。一言で言えば、東アジアにおける旅行システムの確立に伴い、人の移動が可能となりました。

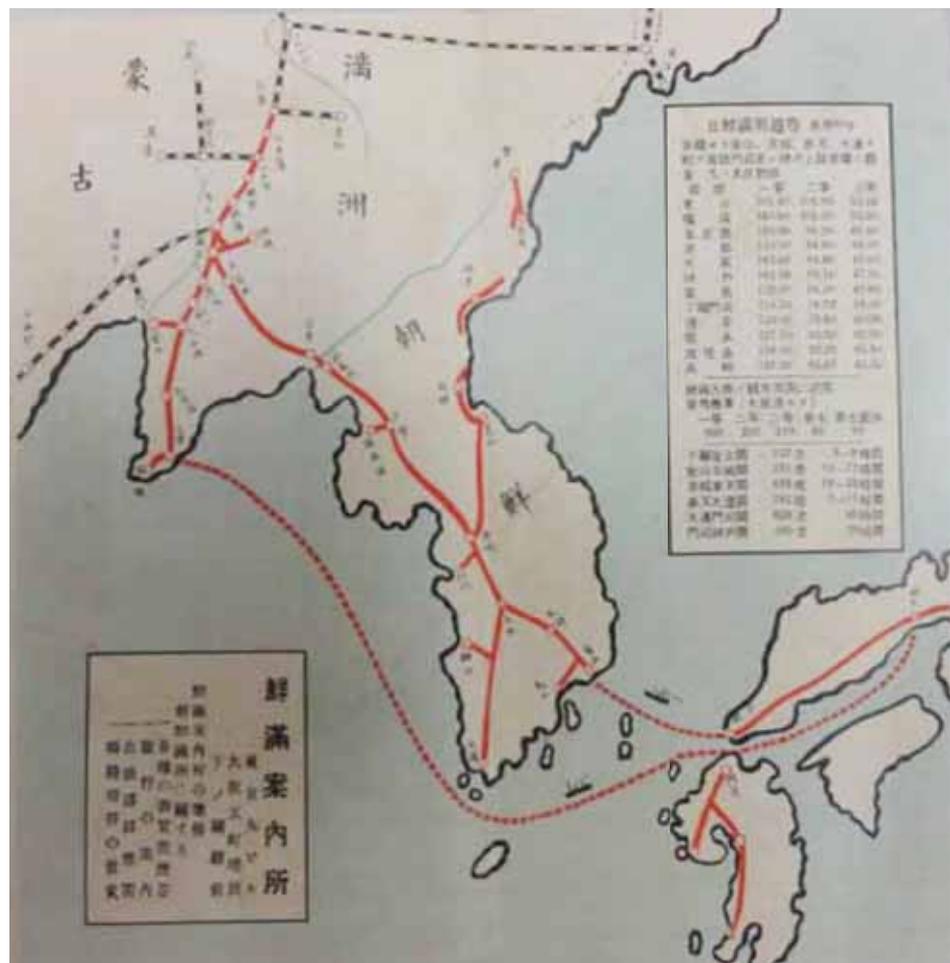


図 14 日本と東北の航路と路線

中国の場合も同様です。1906年に京漢鉄道が建設され、1908年に上海から南京への鉄道も建設されました。最初の鉄道は北京と張家口との間に建設されたことから、張家口の伝統貿易における重要性が分かります。

また中国も旅行会社を作り始め、旅行雑誌も発行するようになります。では、中国にとって旅行システムはどのような役割を果たしたのでしょうか。それは、主に近代国民国家意識形成の促進、外部との出会いによる自己再認識の達成です。

そして、旅行を通じて多くの古典文化を観光化することができました。たとえば、万里の長城はこれまで観光地として扱われていませんでしたが、この時から観光スポットとなりました。要するに、旅行を通じて、景観や空間に対する私たちの認識が変化しました。

また、旅行に関する絵ハガキも大量に作られ、そのような絵ハガキは景観を宣伝する役割を果たしていました(図15)。日本に保存されている絵ハガキから、当時の日本人が中国北方地域を旅行する様子が窺えます。今でもほとんどの北方地域の絵ハガキの景観は、1930年代に日本が選んだものとほぼ同様です。これらの景観は当時日本人をはじめとする外国人のために選ばれたものでしたが、現在の中国人にも影響を及ぼしています。

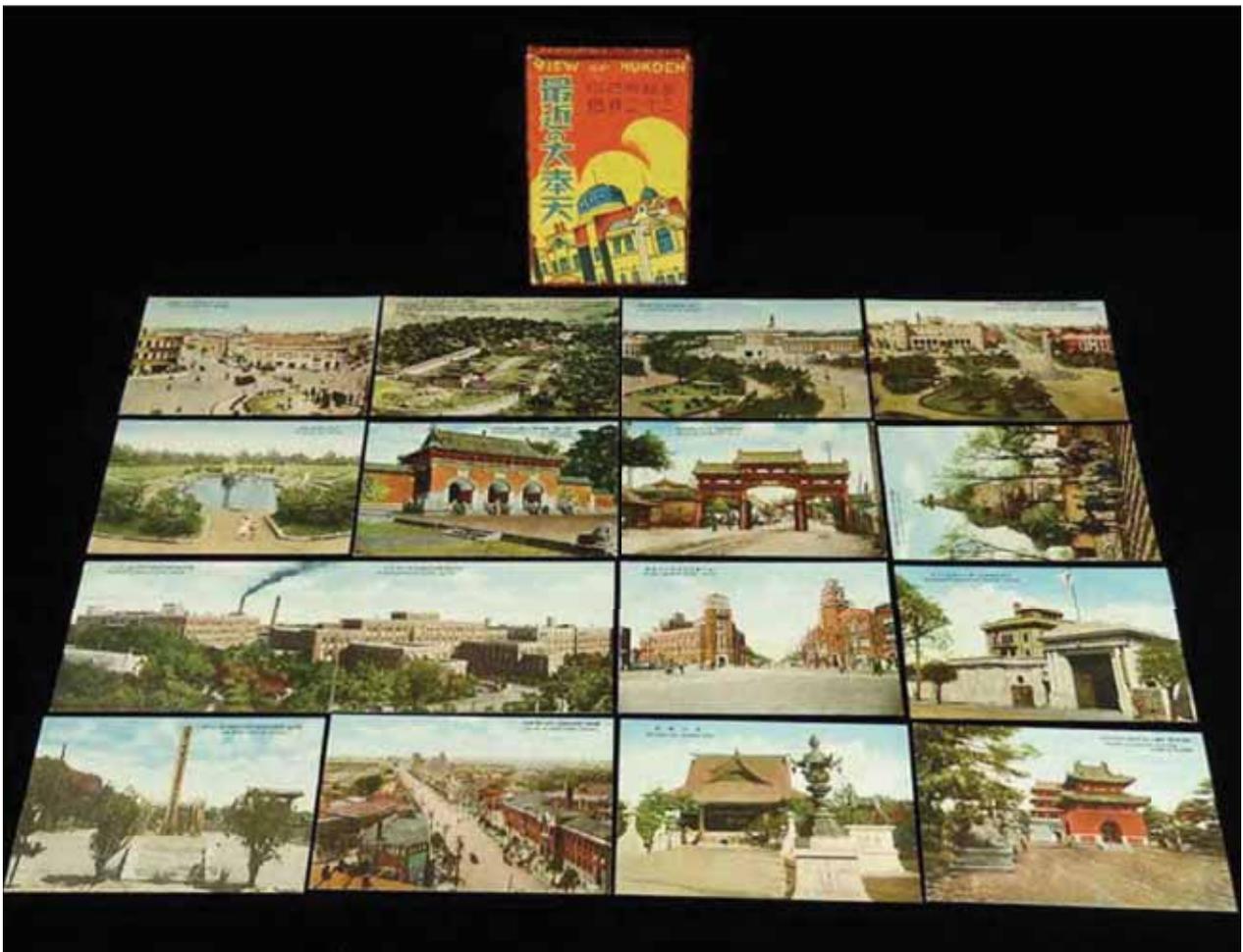


図15 包装された瀋陽ハガキ

【6】文化 I

次に文化にも簡単に触れたいと思います。歴史学において「上青天」と呼ばれたのは、上海、青島、天津です。もちろん私は先ほど言及した広州もこれに加えるべきで、次にお話しする大連も加えて、本当は「上広大青天」と呼ぶべきです。まさにこの5つの都市から中国の近代化の脈絡を見出すことができます。

これらの都市の発展は空間の拡張と密接に関わっています。大連はいわば帝国の拡張と関係している都市で、その後多くの都市の建設が大連を手本とするようになりました。まずロシア占領期の大連についてですが、当時ロシア人はフランスのパリを崇拝していたため、パリをモデルに大連を建設しました。地図から当時の放射状の道路が見て取れます（図16）。日本統治期に入ると、広場や道路の文化をさらに強化させ、ロータリーなども建設し、警察や政府機関など公的機関を広場周辺にめぐらせ、植民地的権力を強化していました。その実行は非常に計画的且つ徹底的で、この方式は他の都市にも広がっていきました。

これは瀋陽の地図で、中に古い街と付属地があります（図17・図18）。付属地は大連をモデルにして作られたもので、放射状の道路や広場があり、昔の伝統的な街を少しずつのみ込んでいく様子が見えます。



図16 大連中心部の放射状の道路（環形交差）



図17 初期奉天市街図



図18 後期奉天市街図

中小都市もそうです。私が暮らしていた遼陽市はもともと四角い形の古い街でしたが、附属地に併呑された後、大連式の街に変わりました。長春市も同様です。日本の敗戦によって未完成に終わりましたが、計画図を見ると当時の都市計画は大連をモデルにしており、非常に整然としたものだったことが分ります。

【7】文化 II

「植民地の近代化」は沿岸地域から内陸へと浸透していき、後に2022冬季五輪の開催予定地である張家口まで浸透していきました。当時張家口は「蒙疆」と呼ばれていました。日本から張家口へ移住した人はおよそ4万人、上海への移住者は10万人、大連は10万人、その後20万人に増えました。当時満州全体で150万人の日本人がいました。これらの都市にどれほど移民がいたかはよく分かりません。ただ、日本が張家口へ4万人も移住させたことは、現在では考えられない程謎めいた行為だと思います。

その理由は張家口は地理的にロシアやモンゴルに近く、開拓できる市場が多いところにあるのだと思います（図19）。伝統貿易の観点から、日本がこの地域を重要視しました。張家口への考察から、当時の日本人が中国の貿易拠点を如何に捉えているかが窺えます（図20）。モンゴルやロシアとの関係を重視していた日本人は、既に早い段階から領事館を建てていました。

図21の路線図が示しているように、華北地域を占領した後、日本は鉄道を通じて全域を連結するようにしています。張家口と内モンゴルとの商売往来はすべて日本人の監視の下で行われていました。



図19 張家口新市街地



図20 張家口旧市街地



図 21 張家口鉄道路線図

日本人はここで三井などの洋行も設立しました。当時の地図から見ると、旧市街の外に市街を建設し、華北地域を占領した後にこちらに繋がる鉄道も整備するようになり、各地域に大きな影響を与えました。例えば石家荘は、最初は村落でしたが、日本の占領と開発に伴い、次第に省都都市へと発展しました。

次の絵ハガキを見てみましょう。絵ハガキは主に景観の変化を反映する装置であり、日本人は植民地の成果を強調するために多様な絵ハガキを作成しました。これらの絵ハガキから占領前後、新旧都市の変化が一目瞭然です（図 22・図 23）。

張家口を予備国土とする日本国民の認識もこれらの絵から伺えます。「大好山河」、蒙疆政府、旧城など繰り返し登場する景観、鉄道、また彼らが誇りにして



図 22 張家口の城門

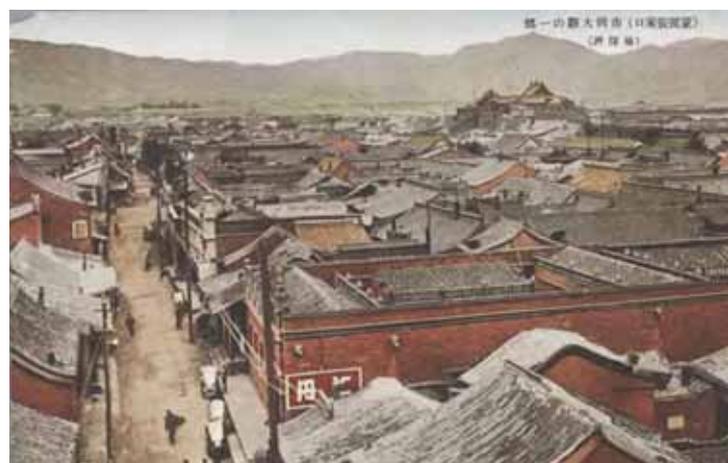


図 23 張家口の市街



図 24 張家口にある日本領事館

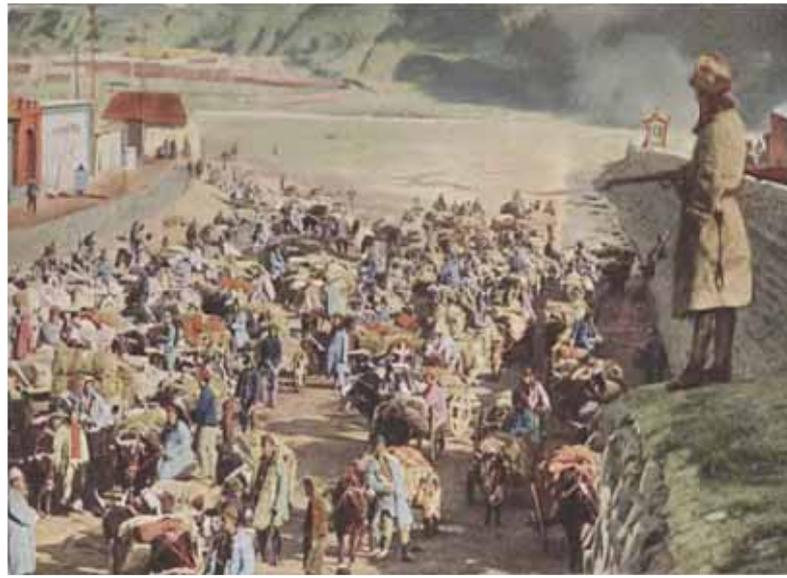


図 25 張家口の城外

いた北中国最高の道路橋も見えます。そのほか、公園も建設し、また商売をするモンゴル人と漢人に、哨兵の監視の下で取引をさせていました。貿易秩序を維持するために、彼らは多くの社会基盤となる施設も建てました。現在残っている駅がその一例です。また、ウール取引の現場、日本領事館の写真などもあります(図 24・図 25)。他の地域にある領事館は大抵簡素なものですが、張家口の領事館はととも立派で、張家口を重視する日本の姿が伺えます。

また絵ハガキのシリーズにおいて、日本人は新旧都市間の差異をととも強く強調しています。図 26 は蒙疆政府で、図 27 は中国の旧政府(モンゴル連合自治政府)です。ハガキの絵から、日本人が建物の立派さを意識的に強調・宣伝しようとする意図が窺えます。



図 26 張家口蒙疆政府



図 27 張家口モンゴル連合自治政府



図 28 深沢省三の作品

このような絵ハガキが流行している時、張家口が絵画創作上の重要なテーマの一つにもなりました。この時期に、多くの日本画家が中国に来てたくさんの風景画を創作しました。たとえば日本の東北出身の洋画家である深沢省三。彼は張家口で後期印象派の絵をたくさん描いています（図 28）。

結び

最後に数分を使って内容をまとめます。なぜ東アジアを全体的に見る必要があるのでしょうか。実は東アジアが時間的にも、空間的にも一体性を持っているということを強調したかったからです。

西洋文化の受容は東アジアが共通して経験した過程です。西洋文化は侵略性と啓蒙性という二重性を持っており、西洋文化の侵略性を批判する際に、啓蒙性を受容した共通の過程も無視できません。

東アジアの中においても、西洋（新）と東洋（旧）という比較と対立が存在します。東アジアの中では、日本は西洋（新）のように位置付けられているのに対し、植民化された他の地域は東洋（旧）と見なされています。言い換えれば、東洋と西洋の対立のほか、東アジア内部の東洋と西洋の対立や比較も存在しています。

結果として最終的に各国はそれぞれ西洋文明を受け入れています。その過程はかなり複雑で、また多くの人々に苦痛をもたらしました。ですから、これまでの保守的な一國史観を打破し、地域史、文化史的な観点からこの間の歴史を再考してみたらどうでしょうか。そうすると、文化力により、外交、軍事、政治などの要素を相対化し、この 200 年の歴史をより客観的に眺めることができるのではないかと思います。私の発表は以上となります。10 分くらい超過したかもしれませんが、大雪の日にお越し頂き、私の発表を聞いてくださったことに厚く御礼を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

討論

モデレーター

王中忱

(清華大学中国文学科教授)

討論者

王京 (北京大学日本語学科准教授)

劉曉峰 (清華大学歴史学科教授)

王成 (清華大学外国語学部教授)

董炳月 (中国社会科学院文学研究所教授)



モデレーター

王中忱 (清華大学中国文学科教授)

清華大学中国文学科の王中忱です。劉建輝教授、非常に充実したご講演を有り難うございます。劉教授は概念、言語、自己認識、文学、旅行、文化の6つの方面から、近代日中200年間の歴史、つまり1810年にプロテスタント宣教師が東アジアに来て以降の歴史を、中国・日本・西洋の三者の相互関係、また20世紀以後日本文化が中国文化に与えた影響について、講演してくださいました。

近年、日中関係を論じた本が多くありますが、所見の限り、19世紀末、とりわけ1894年または1895年を研究の起点とするものが多いです。それに対し、劉建輝教授はより長い期間の歴史を考察し、200年間の日中関係を議論しています。劉教授は主に世界史観に基づいて考察しています。

ご存じのように、近代以前の日中関係は中華世界と朝貢貿易システムの中にあります。日本はこの朝貢貿易のシステムに属していません。当時東アジア間の国際関係はこの朝貢貿易との関わりによって体現されていました。劉教授が指摘したように、19世紀初頭に入ると状況が微妙に変わりました。

この変化は広州十三行を指しています。この西洋に由来する貿易システムは、東アジアに大きな影響を与え始め、その変化自体は十三行の内部によって起こりました。西洋列強や西洋資本主義を議論する際に、この影響は内部に起因し、外部への影響は非常に限られているという認識が一般的です。しかし、劉建輝教授は西洋貿易システムの内部の変化に着目しました。西方はちょうど独占資本主義から自由貿易体制へと転換する過程にあったので、このような転換は東アジアの体制に如何なる衝撃を与え、東アジア内部の変化をもたらしたのでしょうか。劉教

授は政治・軍事・外交の問題のみならず、文化拡張、文化転換という今日の講演の重点問題にも着目しています。このような視点から、宣教師はこれらの概念を先に中国国内に輸入し、半世紀の間大きな連鎖型の反応は起こらなかったことが理解できます。

その一方、宣教師は日本で独特な影響力を持っており、日本を媒介にしてこれらの概念が中国へ逆輸入され、清末期の中国に一連の連鎖的な反応を起こしたという非常に詳細且つ微妙な変化の中に、近代世界が形成されました。私はこのことを聞かせていただき、大変刺激を受けました。

また劉教授が提起したいくつかの空間もなかなか興味深いと思います。広州から上海へ、最後は張家口に至ります。張家口は北京の近くです。2年後に張家口から北京への高速鉄道が開通したら、北京まで40分しかかかりません。このように近いところが逆に私達の視野の外に置かれていました。そのため、劉建輝教授のご発言は大変意義があると思います。私たちはよく海路の拡張から資本主義の世界的な拡張を見ていますが、陸路拡張による変化に対しては関心が薄かったです。資本主義の拡張は海路、陸路に関わらず、張家口のような中国北方地域にも影響を及ぼしています。張家口はヨーロッパとアジアを結ぶ通路で、ロシアモンゴルの路線が何をもたらしたのか、このことはこれまでの歴史研究ではあまり議論されてこなかったようです。劉教授は講演の結末に大変興味深い話題を投げかけました。私はこれ以上の時間を取ることができないので、ここで終わらせていただきます。

指定討論

1

王京 (北京大学日本語学科准教授)

こんにちは。北京大学日本語学科の王京です。今日ここに集まっているのは各分野の非常に重要な学者の皆さんで、このような場で発言の機会を頂き、大変光栄に思います。まず劉建輝教授のご著作と講演についてですが、非常に意義のある課題だと思います。中日間のギャップが一体どこから来ているのかという現実的な問題提起が、劉教授の著書『日中二百年—支え合う近代』の前書きとあとがきにはっきりと書かれています。この問題は現実社会の政治問題と関わっているかもしれないし、国民の感情や好みの問題、もしくはメディア報道の偏りの問題にも関わっているかもしれませんが、劉教授はこの問題を知識人の役割に結びつけることで、このような状況を作り出した歴史的な根拠を求めようとしています。

現在の東アジア間における代表的なギャップは、戦争中と戦争後の冷戦体制という分断体制です。もしこの体制を戦争中と戦争後に分けて検討すれば、ほぼ同じ結論に辿り着けます。

しかし、劉教授の研究は戦前まで視野を広げ、近代化の全プロセスを視野に入れて考察しています。中日200年という把握は、すでに形成されていた歴史の区

切りを新たに区分しようとしているように見えます。歴史を振り返れば、歴史の発展史において、中日両国は非常に密接な関係を持っています。そこで、このような区切りをつけるためにはいくつかの要素が欠かせません。一つ目は、本来のつながりを一旦切り崩し、そこに新たに意味を与えること。二つ目は歴史社会の発展過程に現れていること。もう一つは国民国家の発展に対し、国と国のカテゴリーを国民・国家を単位にして新たに切り分けることです。ここ10年、20年の歴史学研究や中国社会、日本社会の発展から見ると、各研究分野には従来の枠組みを突破しようとする欲求があります。例えば連続性の強調、日本が大日本帝国文化を見直すことの強調、また劉教授が言及した都市建設の問題、旅行の問題、文学の問題、越境の問題などがあります。このように、現在形成されている国際的要素は、当時帝国において様々な準備が行なわれており、萌芽や胎動が確認できるようになりました。このような観点が日本学術界の一つの潮流です。

関係性という観点から見れば、両国の文化交流史は両国の学者たちの注目が集まっている重要なポイントです。ただし、従来の研究のやり方は単一的で、たとえば五四運動後の両国関係に関する研究は当時の歴史のみに注目してきたので、そこからこの視点に基づいて研究範囲を拡大していきます。日中両国の間にある相互影響の問題を総合的に考察する研究は比較的少ないのです。劉教授の研究の最大の特徴は、これら全ての問題を融合して考察するところにあります。歴史の連続性にも、国と国との全体性にも注目することで、中日200年を一つの完成した枠組みとして捉え、この200年をアジア全体が西洋の文明の受容と衝撃に対応するというよりマクロな課題と見做しています。

私は劉教授の講演からいろいろ刺激を受けました。近代以降の日中関係を研究する場合、日本は中国に大きな影響を与えたことを強調してきましたが、北京大学の王曉秋教授は従来の研究より一歩踏み出し、アヘン戦争後の中国が日本にどのような影響を与えたかを研究しました。劉建輝教授は更に宣教師の役割を研究の視野に入れていました。近代以降、実はこのようなルートを通じて中国から日本に伝わったものが多いのです。

劉先生の研究は、日本から中国に輸入したものが、実は以前に中国から日本に伝わったものだったということをはっきり示しました。それで、歴史が一つ一つ関係しあう時期から集合した全体となり、全体像もより明確に見えてきました。国民性の観点から見れば、中国と朝鮮を参照した上で、日本は自己の民族認識を形成しました。この過程は反転の過程でもあります。この反転は留学によって中国の知識人に吸収され、中国の国民性に対する理解が形成されました。

この200年は実はヨーロッパに直面し続けてきました。一方には西洋に対するアジア全体の問題、もう一方にはアジア内部の対立問題があります。日本には西洋と比べると物質対精神の問題がありますが、アジア内部においては物質的にも精神的にも優越性を持っています。戦後進歩派の知識人である竹内好は、中国を新しい方法や資源にして日本の思想体系に組み込もうと精神面における逆転を図りましたが、結果的に成功せず、思想の断層になってしまいました。この思想が残念ながら、文化大革命によって消えてしまいました。

自己認識の確立から中日の共通点が見られます。中国も日本も近代化の道にお

いて結果至上という思想負担を抱いています。中国は日清戦争で失敗したことから、日本の進み方が正しく、西洋を学ぶために加速すべきだと認識するようになります。文化大革命によって近代化が中止されましたが、アジア全体の歴史から見れば、西洋文明の衝撃を受けながら自らの発展を図っています。この特徴が他の発展の可能性を制限してしまったといえます。

また、日中両国の相互認識において、対象国の主体性の欠如という共通の問題を抱えています。日本人が見た中国は本当の中国ではなく、積極的な面から理解すれば中国への憧れと言えますが、マイナスな面から理解すると中国の怠惰や汚さへの蔑視だと言えます。それらをひっくり返して考えてみると、また中華趣味や郷愁にもなりうる。このような論述は本の中に多く書かれています。実際、日本が現実社会の中国、または実際の中国に対して二重の印象を持っており、現在の日本国民の中国に対する印象の調査によれば、中国の古典や伝統文化を高く評価する一方、現実の中国に対する評価は低いです。この点から見れば、このような二重性がまだ存在しています。

中国から日本を見る場合も同様です。近代まで日本を未開の地域と認識していましたが、近代に入ってからからの日本に対する評価は主に次の3つです。(1) 日本は冷蔵庫のように中国の優れた古典文化を保存した。(2) 日本を西洋文明輸入の窓口とみなし、あまり高く評価しない。(3) 経済的發展から見れば日本の科学技術の達成度を高く評価する。しかし、日本の国家や民族の主体性に対する評価はそれほど高くないので、中国も現実の中の日本と想像の中の日本という二重の基準で日本を見ています。今日の日本は西洋を学んだ上で科学技術の発展を遂げた国だと思う中国人が多いのですが、このようにお互いに二重の基準を持っていることで、現実から離れて相手の国を評価する傾向がありました。

ただし、なぜ200年前にこのような文化的交流ができたのでしょうか。劉教授が説明したように、両国が古代からある漢字と古典文化という共通の教養体系を持っているからです。しかし、時代の変化に伴って、このシステムは徐々に崩壊し、共通の基礎まで喪失してしまいました。劉教授は今東アジアの結合点、共通点を構築すると言っていますが、この結合点を如何に探し、如何に変化した基礎において新しい共通の教養システムを見出すのか。この課題は両国の学者たちが考えなければならない重要な問題です。

個人的には、このような結合点を見出すために、中日両国が共通の目標と意図を持つことが必要だと感じています。共通の目標がなければ、何を見ても取捨選択が行われ、ネガティブな面やポジティブな面だけ見ることになりがちです。例えばこの文章から、日本の植民地が現代中国の発展に基礎を築いたと理解することができますが、ひっくり返して考えれば、全く違う内容にもなります。文化を語る際に政治軍事をいかに考えるか。植民地時代において日本は鉄道や工場などの施設を建てましたが、当時の目的と貿易体制は極めて明瞭です。当時の自由貿易といってもあくまで個人レベルでしかありえませんが、その背後に政治・軍事の目的があるかどうかという問題こそ、検討すべきだと思います。

しかし、戦後60年、70年、現在の平和な時代に入ると、植民地時代の目的や意図の色を脱色させ、歴史的事実を無色透明にし、客観的に存在する結果として

みなします。劉教授は文化の立場からこの200年の歴史を考察しています。日中関係の発展の結果がまだ見えない時に、軍事政治と文化の関係をいかに捉えるかは、劉先生と議論し続けたい問題です。著書の副タイトルは「支え合う近代」ですので、日中両国の近代化のプロセスはまだ完成していません。中日両国における不可分な相互関係を認識すべきです。例えば、今存在しているお互いに関連しなくてもいいという虚妄な考え、また中日両国に必ず戦争が起こるという愚かな考えを再検討すべきです。私の発言は以上となります。ありがとうございました。

指定討論

2

劉 曉峰 (清華大学歴史学科教授)

清華大学歴史学科の劉曉峰です。私は主に日本史を研究しています。2013年から2014年までの一年間京都の日文研に滞在したので、劉建輝教授と200年の史観について多く交流してきました。今日、劉建輝教授の講演を聞いて、また多くの感慨が生じました。私たち研究者にとって一つの課題に対して新しい観点を見出すことは難しいことですが、既に体系化した研究を突破することは更に困難だと思えます。

今日はいい勉強の機会だと思います。劉建輝教授はこの本の中で一つ新しい枠組みを提案しました。彼は欧米文明を他者と見做し、東アジアの200年間の歴史を外来文明との対比の中で考察しています。これは非常に有意義な考察視点だと思います。視点の変化は結論の変化をもたらします。劉教授が言及した考察の視点は、大清帝国の衰退と日本帝国の発展、またこうした東アジア内部の交差がもたらした観点と文化の還流です。この枠組みは非常に興味深いものです。単一の国を巡る歴史記述や、もっぱら西洋文明を中心として展開した歴史記述を超え、東アジアの歴史記述の他の可能性を与えていますので、非常に意義の大きい研究だと思います。

それをめぐる具体的な考証が展開された後、啓発的、方法論的な箇所が多くあります。私はしばしば視点の変化が出来事そのものの意味を変えるとありますが、視点がなければ、出来事に対する記述の説得力が常に乏しくなります。例えば、史料に多く言及されている明治漢文体の価値という意義深い課題を、いかに認識し、評価するかは考察の視点によって変わってきます。考察の視点を変えることで史料の活力を再度発揮させることができます。二つの文化の比較から評価しようとする劉教授は、きっといろいろ新しい発見ができます。また旅行とハガキについて、新しい枠組みがないと再認識しにくい対象ですので、文化史的な視点から考えないと意味合いが発見しにくくなります。新しい文化は新しい考察視点によって生まれたもので、それによって慣れ親しんだ史料を再発掘できるようになります。私自身はそこから大きな収穫を得ています。今日の講演は、人の移動、人口の移動、都市建設、広場文化など多元的・総合的な視点を持っています。例

えば張家口の建設についてですが、私は歴史学の視点から見れば、建築学研究の範疇に属するこの問題を、この枠組みに入れて考察することには非常に意義があると思います。哲学研究は概念のみを検討し、文学研究は文学芸術しか考察しない現状に対し、今後文化を理解する際にはこうした多元的・融合的な視点が欠かせないので、方法論的には多くの示唆を与えています。

またもう一つ斬新な視点があります。私自身もこの視点からいろいろと考えさせられました。今年、私は清華大学で「アジア文明と史料購読」というセミナーを開きました。与えられた課題は大きいので、アジアの文化、歴史を理解するために、漢文で書かれたアジアの史料、例えば日本の『古事記』、韓国の『三国史記』、『李朝実録』、ベトナムの『大越史』を取り上げ、学生たちと一緒に読み、議論しました。日本史研究から感じたのは全体としてのアジアが存在しているということです。

ある京都大学の教授が『隋唐帝国と東アジア』という本を書きましたが、その中に、世界史ができた時点で国際化の視野が生まれたのではなく、このような考え方が前近代にすでにあったと述べられています。当時、多くの文明圏が存在していました。例えば中央アジア文明圏、インド文明圏であり、タイ文明圏があり、東アジアには中国文化を中心とした文明圏があります。この文明圏自体が多く論理性と内容を持っています。東アジアは歴史的存在だけでなく、現実的存在であるため、研究の意義は文化史レベルに留まらず、より広い文化的文脈空間が開けると思います。

私が注目している文化遺産の例を挙げたいと思います。例えば中国と韓国の間で端午の節句をめぐる激しい争奪戦が行われていますが、その起因は古代朝鮮半島に伝わった中国の端午の節句の風習が、定着するまでに多くの変化が生じたことにあります。2000年の間保っていた習慣が輸入品だという言論に対して、もし私たちが朝鮮人だったとしたら、気が済まないでしょう。また、中国とベトナムにも似たような問題があります。古代の琉球王国とベトナムが共有した文化が多いです。ユネスコの選考は民族国家を単位にして選ぶため、単一的な国の観点から考えれば、本来一体化している東アジアを分割しなければならず、東アジアの分裂を招いてしまいます。しかし、東アジア諸国には切断しえない共通点がたくさんあるため、東アジアを完全に一つのものとして考えなければなりません。これが我々の民族の将来を考える出発点ですので、非常に重要なポイントです。端午の節句に絞って言えば、世界中に端午の節句をお祝いする民族がどれほどあるのでしょうか。ヨーロッパとアメリカは端午の節句をお祝いしません。一緒に端午をお祝いする民族があるだけで、嬉しいことですが、この民族と争奪戦をするのは、間違った考え方です。

もう一つ指摘したいのは、中国の知識体系は転換すべき時期に来たと思います。近代以来中国の知識体系は、ヨーロッパの知識体系の中で再編される過程があり、劉教授が話した概念の伝播もそうした過程です。しかし、中国をはじめとする東アジア文化圏において、その知識自体が論理性と概念性を持っており、中国が再出発しようとする時にはこうした知識をきちんと整理すべきです。今日の議論はこの作業に対して非常に重要です。中国哲学史を真剣に考えてみると、我々はただ西洋概念を使って中国の哲学思想を分割していますが、分割できない部分もた

くさんあると思います。不健全な考えを避けるため、中国思想の発展を見極めるためには、従来の中国哲学研究のやり方を離れ、起点に戻ることによって、本来のシステムにおいて問題を考察すべきです。中国の哲学だけでなく、中国の歴史学などの分野も再出発の問題に直面しており、劉教授の200年史観は、中国と東アジアの関係を見直すために非常に役に立っていると思います。私は劉教授の研究からたくさん刺激を受けましたので、改めて感謝の意を述べます。ありがとうございます。

指定討論 3

王成 (清華大学外国語学部教授)

清華大学外国語学部の王成です。もともとの専攻は日本語ですが、現在は東アジア言語文学に改名されました。今日は劉建輝教授の講演を再び伺えて嬉しく思います。実は私は劉建輝教授のこの著作を読んだことがあります。今日講演を聞きながら頭の中の記憶も交じって、新しい体験がたくさんできました。劉建輝教授が提案した中日200年史観は非常に重要で現実的な意味を持っていると感じています。我々日本研究者や東アジア研究者に多くの方法論的な示唆を与えており、私個人としても大きな収穫を得たと思います。

村上春樹の『走ることについて語るときに僕の語ること』という本をふと思い出しました。彼が走っているとき何を考えているのかについての話です。我々は東アジアについて話している時に、東アジアとは何か、我々と東アジアとの関係とは何か、について考え続けてきました。劉教授の著作を読んでから、学術的仕組みや現実的な意味合いなどにおいて、東アジアを再認識できるようになりました。

私の研究は日本近代文学です。劉教授が使っていた方法によって、これまで解釈できなかったいくつかの問題や説明しにくいことを再解釈し、そこから新しい問題と認識を得るようになりました。

東アジア近代文化圏という言葉を知ると、やや古い概念のように聞こえるようですが、よく考えてみると、東アジア文化圏について語る時、何を語っているのでしょうか。この問題提起のレベルにおいて、この問題をいかに全面的に再検討できるかは、この課題を見直す鍵になっています。

劉教授の新しい研究方法は非常に野心的で、解体と脱構築という方法を使いました。その過程においては、単に理論的に構築するのではなく、個々の問題から解釈し、検討しています。この点からは従来の研究法に対する反省的な考え方が伺えます。

例えば、「文化交流」という概念を劉教授が新しく解釈しました。彼ははじめてのところに「私はなぜこの研究をするのか。その理由は文化交流の中でお互い

に理解しえない時があるからだ」と原理的に説明してくれました。また、先ほどお話しした教養体系の転換問題についてですが、東アジアの文化圏における文化を教養的な視点から認識・再認識しようとする時、この教養体系は近代化の過程で西洋によって再編成されたため、違う文脈において再検討する必要があります。ただ、この間に形成された複雑な関係をいかに整理するかについては、劉建輝教授のやり方に感服させられます。オリエンタリズム、一国史観、メディア研究、方法としてのアジア・中国・日本、この20年間研究してきた問題や全体としての研究方法が、いつの間にか消えてしまいました。

劉教授の言説は私たちに再びこの研究方法を思い出させました。なぜこの重要な問題が忘れられたか。東アジアを語る時、何を解決しなければならないか、日本か中国、もしくは日中関係からなど、どのような視点から東アジアの問題を解釈すべきかの問題にも関わっています。劉教授が良いパラダイムを示し、西洋文明を受容する近代化の過程において、東アジア文化の変遷がどのように遂げたかを分析しました。この分析は私の視野を広げ、問題意識まで大きく飛躍させました。

私は最近夏目漱石の作品を読んでいます。明治30、40年代には、文学の概念について多く議論されました。夏目漱石が朝日新聞社に入社した後、最初に書いた小説は『虞美人草』です。その時彼が非常に苦悶し、直面していた問題は、いかに近代的な方法で日本文学を書くかということです。漢文学と literature 文学との相違に悩みながら、『虞美人草』を創作する時には、『文選』、『論語』や『離騷』などの代表的な古典漢籍を活用し、小説の描写に漢文学を巧みに入れることで新文体を生み出しました。しかし、現在の研究ではこの小説を失敗作とみなしています。言い換えれば、近代化のプロセスにおいて、夏目漱石に代表される日本文学の近代化は失敗しました。『虞美人草』における文体の失敗はその代表的な例になります。ですが、私はむしろ夏目漱石の近代的な新文体に対する革新的な実践がまだ理解されていないと思っています。そのため、今日はよりマクロ的な視点、また劉教授が言及した教養体系の視点から、東洋文化の近代化における漢文脈の役割を読み解く場合、もう一度『虞美人草』を考え直してみると、この小説は日本文学の近代化過程において非常に実践性のある著作だということが明瞭に見えてきます。劉教授の方法論的な示唆を受けた私たちは、これらの問題を考える際の視野が広がりました。時間の関係でここまでさせていただきます。ありがとうございました。

質問

董炳月 (中国社会科学院文学研究所教授)

今日は大雪で、正直、参加するかどうかを迷っていましたが、劉教授の講演を聞いて、来て本当によかったと思い、いろいろ考えさせられました。この課題は非常に重厚的で、彼は考察する対象となる時期をより前に設定したことで、従来の多くの定説を揺るがしました。そのため、日本の明治時代を再検討すべきだと

思うようになりました。まずは日本の名詞です。20世紀末頃、日本の名詞をめぐる激しい論争がありました。今から考えると、それが大きな問題だと思います。

もう一つは和文漢読法です。当時議論の前提として、先に漢文和読みがあって、後に和文漢読みがあったので、論理は変わりました。

また周作人を例としてあげたのは非常によいと思います。彼が言及した「人」という概念を重視すべきです。私はこの概念についていくつかの資料を提供したいと思います。当時二つの文学社が設立されました。一つは日本で設立された「創造社」で、もう一つは北京で設立された「文学研究会」です。周作人が書いた文学研究会の成立宣言では、武者小路実篤の真似をした語彙が多く使われています。

魯迅は日本に留学した時に「人の歴史」という文章を書きました。この文章は最初「人間の歴史」という題目でした。人間という言葉は日本の漢字ですので、周氏兄弟の「人」の概念を日本から受け取ったことがわかります。

また、張家口の写真を見た時に大学目録の広告もあって、びっくりしました。イギリスのスタン、スウェーデンのスヴェン・ヘディン、ロシアのプルヴァリスキーがよく知られていますが、日本の大谷光瑞探検隊の3回の探検についてはあまり知られていませんでした。1回目はヨーロッパ発、2回目は日本発、3回目は張家口発です。実際にこの探検は1902年から1914年までの間で、最も期間が長く、最も規模の大きいものです。野村栄三郎が書いた『蒙古新疆旅行日記』は張家口、また大学目録に言及しています。私は以前、大学目録に注釈をつけるためにいろいろ文献を調べました。当時日本の薬が張家口まで浸透していて、張家口に日本メディアの拠点もあります。ここから、明治日本が張家口をどのように位置づけたかの問題になります。言いたいことがまだまだたくさんありますが、機会があればまた劉教授にお伺いしたいです。ありがとうございます。

回答

劉建輝

いろいろなお質問、ありがとうございます。いくつかの質問に簡単にお答えします。一つ目は王京先生の近代植民地理解に関する質問です。王先生が帝国化によって広がった啓蒙性や、建築などには他の力関係もあると言っていますが、それは当然あります。近代はもともと侵略と啓蒙の結合体だと捉えています。なぜこのように捉えているか。私たちはこれまで侵略を強調しすぎて文明開化を重視してきませんでした。それ自体も結合体なので、侵略は啓蒙であり、啓蒙は侵略であると。そうすると、植民地の近代は説明しにくい問題になります。それがポイントです。

劉曉峰先生は一つ大きな問題を提起しました。自分が持っている知識体系を使って自分自身を解釈・説明することは難しいです。なぜなら、人は一旦目覚めると元の状態に戻れないからです。それが私たちの悩みでして、西洋の影響を受けてしまったものですから、5、6百年前の知識体系に戻りたいと思った時に、

もう戻れないかもしれません。

また、王成先生は夏目漱石の文体をいかに解釈するかというすごくいい質問をしました。それは当時の文脈における反抗と受容の過程でもあります。漱石は自分の文体と当時の明治小説の文体を解体させ、その方法を捨てられようとしていた漢文の活用に求めようとしていました。非常によい指摘だと思います。

そして吉川先生の質問にお答えしていなかったのですが、それは中日両国の教養体系に切り離された部分があるからです。実際、文化の力を放棄したのは我々人間です。この70年間たくさんの文化交流をしてきましたが、今日の結果から見ると、この努力は実に無効です。日本の脱亜入欧を軍事・文化の角度から見ると、本当にそれがなされたのは明治期ではなく戦後のことです。この時期にアメリカ化されました。その時期の歴史を研究してこそ、教養の断層を修復することが可能になります。お互いに歴史を正視し、共通の視点から歴史を眺めるといふ結合点を探してこそ、和解の可能性が生まれます。

また董先生がお話しされた張家口の問題ですが、また個別にお話ししていただきたいです。張家口についての研究は既に何名かの先生が進めておりますが、現在は、日本経由で海からアジア大陸までの大循環があり、張家口はこれまでこうした視点において考察されてきました。これまで我々は文明の行方をあまり重視しませんでした。モンゴルの問題をいかに捉えるかについては熱心でした。漢字文化圏と認められている東アジアにおいて、モンゴルは漢字文化圏とヨーロッパ文化の二重の影響を受けました。そのため、今後内蒙古と外蒙古を総括的に研究できる枠組みを設定することが、引き続き考えるべき課題だと思います。時間の関係で、私の発言は以上となります。

+++

王中忱：本日は大雪のため、会議の終了が遅くなりました。ご来場の皆様、最後までご熱心にご参加いただいた方々、どうもありがとうございました。夜景は見えないかもしれませんが、明日は美しい雪景色を楽しめます。大雪は豊年のきざしです。これからの皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。では、今日の会議はこれで終わります。

講師略歴

■ 劉建輝 【りゅうけんき】 Liu Jianhui

国際日本文化研究センター 教授 1961年、中国・遼寧省生まれ。中国・遼寧大学外国語学部日本語科卒業。神戸大学大学院文化学研究科博士課程修了、文学博士取得。中国・北京 大学比較文学・比較文化研究所助教授、国際日本文化研究センター助教授を経て、2013年4月より現職。専門分野は、日中比較文学、比較文化。主要著作に、『日中二百年——支え合う近代』（武田ランダムハウスジャパン、2012）、『増補・魔都上海——日本知識人の「近代」体験』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、2010）などがある。

北京会議報告

孫建軍 (北京大学日本語学科准教授)

11月22日に北京大学外国語学院の新しい建物の5階会議室で開催したフォーラムは、日曜日の上に大雪という悪条件にもかかわらず、50人以上の方々にお集まりいただき、熱のこもった議論が展開された。

午後3時に開会が宣言され、最初に、特別ゲストの北京大学元培学院の孫華院長より、優れた人材育成において国際的かつ学際的な視点をもたせる教育が必要という、SGRAにぴったりのお話をいただいた。次に、国際交流基金北京日本文化センターの吉川竹二所長より、鏡を例に文化交流の大切さについて示唆に富むお話をいただいた。

続いて、劉建輝先生が、パワーポイントを見せながら、「日中200年——文化史からの再検討」というタイトルで、「東アジアの歴史を語る時、ほとんどの識者が古代の交流史と対比して、近代の抗争史を強調し、両者の間に一つの断絶を見出そうとしてきた。しかし、もしこの間の三国間の文化的交流、往来の足跡を精査すれば、そこには近代以前とは比べられないほど多彩多様な事実、事象が存在していることに気付く。そしてその多くはいずれも西洋という強烈な『他者』を相手に、いかに互いの成果、経験、また教訓を利用しながら、その文化、文明的諸要素の吸収、受容に励む努力の跡にほかならない。その意味で、東アジア、とりわけ日中韓三国はまぎれもなく古来の文化圏と違う形で西洋受容を中心とする一つの近代文化圏を形成していたのである」という主張を熱く語った。

先生のご研究では、「支え合う」というキーワードの下で、キリスト教研究、植民地研究、都市史、文学、経済など、従来個々の分野で展開されがちのものが統合され、超域的研究のアプローチが試みられている。日中関係は二国間で見るのではなく、200年という長さで見れば、西洋化の流れにどう対処するか、両国が補完し合ってきた実像が見えてくる。つまり、両国は近代化に当たり、隣国（日本にとっての中・韓、中国にとっての日本）との関係の中で自己のアイデンティティーを確立したのである。漢文の近代的発展、新漢語の造出、近代文学者の足跡、近代思想の発祥と伝播など、いずれも「支え合う」特徴が色濃く残り、確実に検証することができる。

ご講演の後半には、当時の近代国際都市である「張家口」が「支え合う」実例として登場し、鋭い洞察と該博な知識に満ちた見解が出され、会場全員の関心が一層高められた。



短い休憩の後、本フォーラムを共催する清華東亜文化講座の主宰者の1人、清華大学中国文学科の王中忱教授の司会によって、北京大学日本語学科の王京准教授、清華大学歴史学科の劉曉峰教授、同じく清華大学外国語学部の王成教授からコメントがあった。

大雪警報にも関わらず、劉建輝先生の情熱的なご講演のおかげで、参加して下さった方々から「先生方に様々な角度から中日の200年を探っていただいたおかげで、歴史をより深く理解することができました。」「最も重要なのは、問題を発見する方法をいくつか学べたことでした。」「もっと勉強・研究・探究したくなったほど、久しぶりに好奇という気持ちを抱きました」などの暖かい反響をいただいた。

12月の北京は晴れた日が少なく、ひどいスモッグの日が続いた。スモッグ対策はまったくできておらず、基本的に風任せだと揶揄されている。そんな日には、張家口の話がいつも脳裏をよぎる。北京は北西を除けば盆地状となっている。冬には北西の風が吹けば晴れる。さもなければ、汚い空気が溜まってしまう。張家口はその風の通り道に位置するため、昔から重工業が規制されてきたようである。張家口は北京の空気をよくするために重要な役割を果たしている。70年前の張家口の都市文化も今の北京の空気改善に役立つのでは、とつくづく思う。

■ 孫建軍 【そんけんぐん】 Sun Jianjun

1969年生まれ。1990年北京国際関係学院卒業、1993年北京日本学研究センター修士課程修了、2003年国際基督教大学にてPh.D.取得。北京語言大学講師、国際日本文化研究センター講師を経て、北京大学日本語学科准教授。現在早稲田大学社会科学学術院客員准教授、早稲田大学孔子学院中国側院長を兼任中。専門は日本語学、近代日中語彙交流史。

フフホト会議報告

娜荷芽 (内蒙古大学蒙古歴史学科准教授)

2015年11月20日、中国内モンゴル自治区フフホト市の内モンゴル大学で、渥美国際交流財団関口グローバル研究会主催の第9回 SGRA フォーラム in フフホト「日中200年——文化史からの再検討」が開催された。フフホトでの SGRA チャイナフォーラムは、2010年、2011年に続く3回目である。前2回のフォーラムは内モンゴル大学モンゴル学研究中心を中心に開催され、渥美財団の事業及びチャイナフォーラムを内モンゴルの若者たちに広く知らせる場を提供し、とても良いスタートを切ることができた。今回は国際交流基金北京日本文化センターの協賛を得、内モンゴル大学モンゴル歴史学部、清華大学東亜文化論壇、北京大学日本語文化学部との共催であった。本大会は劉建輝教授（国際日本文化研究センター）を迎え、「日中200年——文化史からの再検討」をテーマに進められた。

開会式は午後3時から始まり、ボヤンデルゲル教授（内モンゴル大学）の司会で行われた。まず主催者側からソドビリグ教授（内モンゴル大学）の歓迎の挨拶があった。次いで本大会開催にあたって渥美財団の今西淳子常務理事からの渥美財団及び SGRA、チャイナフォーラムの現在にいたるまでの歴史の紹介、王中忱教授（清華大学）、周太平教授（内モンゴル大学）、孫健軍副教授（北京大学）から祝辞が述べられた。その後、劉建輝教授による講演がはじまった。

劉教授の講演は内容構成として1. 前近代と近代における東アジア文化圏の異同、2. 支え合う日中の近代文化、3. 過去、現在から未来へ—「東アジア文化圏」再構築の可能性と課題、4. 東アジア近代と張家口、とに分けて、当時の貴重な資料を交えながら、詳細なデータと豊富な写真をパワーポイントで紹介した。日本と中国の近代史は、東アジア地域に多大なものを残している。不幸と悲劇だけではない、お互いの交流によって誕生した出来事と文化事象をもう一度見直してみる。そこにはまさに支え合う関係があるという日中関係の新しい歴史視点を詳細にかつ具体的に述べ、内モンゴル大学のモンゴル人研究者たちと率直に議論を深めることができたことは大変有意義であった。

特に、張家口は伝統的に、モンゴルやロシアとの交易を行う中国の要衝で、また蒙漢両民族を分かち「国境」でもあった。本来、日本は直接的にはほとんど関係のなかった「周縁」地域だが、大正、昭和に入ってから、日中の軍事、経済的勢力の消長により、一時「蒙疆」と呼ばれていたように、「満洲」や上海などと

並んで、日本ないし日本人がもっとも深く関わる場所の一つとなった。劉教授は「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトの一環として、張家口に関する現地調査や資料収集を行っておられ、その詳細な研究の方向性は高い評価を受けており、今後一層の研究交流が図られることが期待されている。

講演の後、質疑応答と活発な討論が行われ、講師からの回答及び補足説明などもあった。その後、閉会の辞があり5時に会議は無事に終了した。参加者は内モンゴル大学歴史学部、内モンゴル大学モンゴル学研究センターの研究者の他、内モンゴル大学の学部生、院生、日本からの留学生、他大学からの出席等百余名を数えた。

■ 娜荷芽【ナヒヤ】 Naheya

2012年東京大学総合文化研究科博士号取得。内モンゴル大学学士、東京外国語大学修士。2011年度渥美奨学生。武蔵大学非常勤講師、和光大学非常勤講師を経て、2012年に内蒙古大学蒙古歴史学部で講師を務めた。SGRA 研究員。



中日200年 从文化史进行再探讨

论坛旨趣

长期以来，在探讨东亚历史时，绝大部分学者都会将近代部分与古代的交流史进行对比，并对该部分的抗争史加以强调，以试图找出二者间断垣之所在。诚然，仅关注政治、外交的话，日中、日韩等国之间确实出现了包括战争在内的诸多对抗及对立，正常的邻国关系也几乎未曾得以建立。但是如果对这段时期三国之间的文化交流和往来足迹进行详查的话，就不难察觉其间存在的丰富多彩的事实和现象却是近代以前所不可比拟的。其交互往来大多正是以西方这一强烈的“他者”为对象，在相互吸取各自的成果、经验和教训的同时，为吸收和接纳西方文化、文明的诸多要素付出了努力。从这一意义上来看，东亚，特别是日中韩三国间明显形成了一个以学习西方为中心的近代文化圈，而这一文化圈与古代截然不同。

另外，无论是中国还是日本，在回顾其走过的历史时，以往的研究都存在一种忽视自身与周边的关系，本国所有的一切都依靠自身独立完成的现象。这显然是受到了近代以后在所谓国民国家的框架中形成的民族主义所产生的单边主义的影响。正如诸多古代、近代的史实所示，纯粹的国风文化原本不过是一场“神话”，而我们则是在与他者的关系中逐渐形成了“自我”以及“自我”的文化。对近代日本而言，这一他者当然首先是指西方，同样当然也不能轻视共同走过吸收西方历程的另一个他者——中国和韩国。

近来，特别是在日中两国之间出现诸多摩擦时，人们往往会强调两国之间的“文化”差异，并试图在这一文化差异中探寻“互不理解”的原因所在。但事实上，这一想法难免过于单纯。文化之中固然有着一些不变的历史积淀，但同样也始终存在具有史实性，并随着时代变迁而不断发生变化的属性。因此，如果无视共通的重要历史经验，一味强调文化差异，不仅不会有丝毫收获，反而会使自己陷入僵局。

有鉴于此，本论坛将对所谓的旧有单边主义史观、文化互不理解论等弊害进行修正，在对以往的近代东亚文化圈、文化共同体的存在进行回顾的同时，一起对将来如何灵活运用其经验教训展开讨论，并且同与会者一起对其可能性进行探讨。（参考文献：刘建辉著《魔都上海——日本知识分子的“近代”体验》2010年，《日中200年——相互支撑的近代》2012年）

论坛缘起

公益财团法人渥美国际交流财团关口全球研究会每年都在北京等地的中国各所大学举办 SGRA 中国论坛，介绍日本民间的公益活动。自2014年第8次大会以后，论坛主旨改为与清华东亚文化讲座共同举办，主要面向北京的日本文学及文化研究者举办讲座等活动。

第9届SGRA中国论坛“中日200年——从文化史进行再探讨”于2015年11月20日（周五）在内蒙古大学蒙古学学院、11月22日（周日）在北京大学外国语学院召开。本次报告是北京大学论坛的演讲录。

关于 SGRA

SGRA，以从世界各国来到日本、经过长期的留学生在日本的研究生院取得博士学位的“知日派”外国研究者为中心，为了对个人或组织在树立面向全球化的方针与策略时有所裨益而进行研究，提出解决问题的建议，并将其成果以论坛、报告、网页等方式广泛地向社会传播信息。根据不同的研究主题，多领域多国籍的研究者编成研究小组，广集智慧与人脉，从多方面的数据来分析、考察，进行研究。SGRA瞄准的不是某一特定的专家，而是广泛地以社会全体为对象，开展包含广阔研究领域的跨国界、跨学科的活动。SGRA的基本目标是实现良好的地球市民作出贡献。详细情况请参看主页（www.aisf.or.jp/sgra/）。

中日200年 从文化史进行再探讨

时 间	2015年11月22日(周日)
地 点	北京大学外国语学院新楼501会议室
主 办	渥美国际交流财团关口全球研究会(SGRA)
协 办	清华东亚文化讲座
赞 助	国际交流基金北京日本文化中心
合 作	北京大学日本言語文化系(北京论坛)
主 持	孙建军(北京大学日本语言文化系副教授)
开幕致辞	孙 华(北京大学元培学院教授) 吉川竹二(国际交流基金北京日本文化中心主任)

【报告】	日中200年 从文化史进行再探讨	44
------	------------------	----

刘建辉(国际日本文化研究中心教授)

	讨论	64
--	----	----

讨论主持人	王中忱(清华大学中文系教授)
讨论者	王 京(北京大学日本语言文化系副教授) 刘晓峰(清华大学历史系教授) 王 成(清华大学外语系教授) 董炳月(中国社会科学院文学研究所教授)

讲师简历 73

	后记	74
--	----	----

孙建军(北京大学日本语言文化系副教授)
娜荷芽(内蒙古大学蒙古历史学系副教授)

講演



中日200年 从文化史进行再探讨

刘建辉

国际日本文化研究中心教授

开场白

承蒙主持人介绍，我叫刘建辉，此次能回到北大并站在这个讲台上，感到非常的高兴与光荣。感谢孙华教授、吉川所长、今西女士，以及清华大学的东亚论坛联合举办此次座谈会，同时我作为问题的提出者站在这个讲台上感到非常的光荣，再次表示感谢。考虑到有同声传译，我准备了一个日文的简单的背景介绍，大家如果听到某个名词或地名，感觉有些生疏，可以参考日文。下面我把近年来的学习心得分享给大家，特别期待和各位评议者进行互动，我争取把时间控制在一个小时内。

问题的提出

首先，我要做一个开场白，谈谈为什么要做这个研究以及我做这个研究的设想。现在大家都讲，特别是历史学界，认为开放的历史主要是与民族主义和近代主义的束缚脱离，这两种束缚一直影响我们对历史研究的思考与叙述。民族主义就是以个国家一个民族为叙述对象，近代主义就是以西方为中心进行叙述，两者的偏差也由此产生。换句话说，就是以一国为单位，切割了与其他国家关系的一国史观。正是在这个语境下进行叙述，产生了中国文学史、日本文学史这一类的文学文化史。但是回归到历史的现场，真实的历史其实并非如此，与其他国家割裂完全属于某一国的历史事实是不存在的。

如果我们把视线转向东亚，中、日、韩、越，以及蒙古，这几个国家无论是古代还是现代都是相互影响的。人们普遍承认这几个国家的古代历史存在着密不可分的关系，而近代通常把这个区域的历史看作抗争史。而当我们以更宏大的视角，以西方来设置一个大的历史环境，在西学东渐的大潮下，刚才所说的东亚几个国家是相互借鉴、相互支撑，共同完成一个大的文化转型的，是在整体语境下完成并接受一个大的西方外来文化冲击的。因此，我设定了200年的时间，再界

定了东亚这个区域框架，把过去的国别史拆解下来，从束缚中走出来，寻找一些真实的历史现象。因为我本身是搞中日交流的，中韩、中越不在我的研究范围之内，所以就以中日为中心开展了研究。

我简单介绍一下为什么是中日200年，我们过去讲近代史都是以中国的鸦片战争和日本的明治维新为起点的，这都是从外交史、军事史、制度史、世界史的角度，以某国为中心独立分析的，但我们把西学东渐这一要素带进来看的话，就会发现实际并非如此，东亚的近代史要早于刚才提到的那些事件。

有些学者把十八世纪末的外交变化看做是东亚近代的起点，而我则主要从文化角度来看，我认为1810年前后东亚开始进入近代。1810年前后东亚开始正式地接受西方文明，当然在明末时期就有传教士来华，在日本有南蛮文化，但是1810年代起了决定作用。此时有了两个要素，一个是资本主义——个体贸易的要素，另一个重要的要素是我们用近代方式思考的要素——概念的要素，我们开始用西方的概念来思考，使我们的政治经济发生了重要变化，在这之后的200年就是我们共同接受西方文化的200年，虽然这之后又有争夺主权的战争，但在接受西方文化这一点上我们是互相借助的。

从200年的大的角度看，中华帝国的前一百年在西方的冲击下逐步瓦解，经过辛亥革命彻底崩溃。而日本经过一百年或更长的时间，也就是十九世纪中期到二十世纪中期是它兴起的过程，其实是两个帝国交叉文化的时期，文化主导权也是在大的交叉中完成的，从中可以看出清帝国对周围地区文化有一定的影响，从广州、上海再到日本，反过来从日本又有一个大的回流，所有这些东西经过帝国到国民国家又有一个回流，这是一个很大的互动。在日本帝国的区域内部，例如东北、广州、上海和内蒙古还有朝鲜半岛和台湾，都有帝国文化圈内的文化互动，这个我们也会涉及到，今天我将从六个领域现象的代表来说明东亚为什么是相互支撑的。

首先，在这里我们希望解构所谓的固有文化、文化“古层”，也许很多人会讲中国的特殊性或日本的特殊性，双方产生不理解也是情理之中，但这都是过分强调自身文化特殊性的结果。我们知道文化是多元的，因而并没有所谓的固有文化，也不可能单一存在所谓日本文化的“古层”，并且这个古层是否是真正的还需要商榷。

近代的民族主义中产生了很多的学问，包括日本的民俗学和历史学，它是在日本近代的国民国家或民族主义的框架下形成的。“日本文化的古层”这个概念经常被用于民俗学，一些日本学者所追寻的古层不一定是日本文化真正的古层，在这个过程中有很多来自大陆的关系。研究日本文化的人士都知道日本文化历来有两个根本，另外日本古典文学都是先写唐土、写天竺，再写本邦。其实古代是有复式眼光的多层认识角度的，而到了近代这种认识方法反而被削弱了。

现在日本国文学中讲国风文学，中国也讲国学，这些说法让人感觉这些文化仅仅产于当地。但据北京大学的严绍璁先生的研究来看，《古事记》中最早的场

景已经蕴含了中国文化的要素。书中说两个神从天上下来结合产生了日本列岛，但最初的结合失败了，因为女方先说话，女方在右边，他们就问上天怎么办，上天说“你们反过来，男的先说话，男的在右边”这样就成功了生下了日本列岛。当时日本的天皇为女性，男性掌握主导权的只存在于大陆文化、中国文化，这就是一种影响。中国人说左迁，因为左是下位，男为右、男为上就显然是中国的文化。从最早的古事记的第一个场面就受这个影响，可见和中国文化的联系是切割不掉的。当然后来汉朝、隋朝、唐朝、东亚形成了文化共同体，各位也都清楚。但今天我想强调的是，即使是进入近代，这个共同体也依旧存在。汉字汉文和佛教的传入，使中日形成了一个文化共同体，但我要说的是第二点，在近代我们也是一个文化共同体。这里我们要纠正一个观点——认为亚洲近代史就是抗争史而只有抗争，实际上近代不仅有抗争还有交流，如果放在一个更大的语境下就是受容史，其实就是共同接受西方文化的历史，

【1】概念

首先我想从概念说起，无论古今，人类思考问题时都会使用“概念”。概念是经历了很长时间一点一点形成的。在中国，最大的一个转折就是1810年的广州十三行。广州十三行是类似于现在特区的一个贸易区，来到这里的传教士开始在这里编纂词典翻译圣经，由此带来了文化上的转折，那时，在广州十三行，一位名叫罗伯特·马礼逊的传教士进行了各种传教活动，这可以认为是文化的转折点。

受到马礼逊的影响，四大词典、英汉词典的出现影响了我们对概念的理解，兰学也属于其中。从那时起概念通过汉译西书和西方传教士在广州办的报纸杂志传到日本，对日本明治维新产生了影响。

日本的朋友有时候不理解，日本的明治维新为什么和中国扯上了关系呢？明治维新不是主要受来自荷兰和英国的信息的影响吗？实际上很多信息是从上海传来的，日本近代史的一个缺点就是为了排除与中国的关系，把自己与西方走的更近作为自己脱亚入欧的特色，他们着力叙述与荷兰的关系，也就抹杀了与上海的关系，认为这个时候的日本历史叙述就是古代是中华文化的国家，近代转型成为一个西方文化的近代国家。实际上并非如此，即使在近代，我们也无法否认上海对日本产生了很多影响，位于日本与西方之间的中国的存在对它的文化转型起了非常巨大的作用，当时的日本武士和官僚接受了在华传教士所宣扬的“概念”，推动了本国的近代化发展。进入20世纪之后，梁启超等将其反哺回中国，因此到1910年前后，才开始形成了关于近代的思考，甲午中日战争前后，还存在诸多关于如何翻译的讨论，战争之后，概念才渐渐地固定下来。这个过程是十分有趣的，也只有日本能完成。因为面对这些概念，当时的中国知识分子很难进行自我否定，展开了各种排斥运动，经历了甲午战争的失败才逐渐接受这些概念，所以这些来源于西方的概念经历了一次从中国到日本再回到中国的旅游，我们现在用



图1 广州十三行商馆（1840年左右）



图2 广州十三行商馆（1840年左右）

的这些从日本传来的概念新词的60%到70%都经历了这种旅游，我称之为“语际的旅游”。

图1、图2是位于广州西南的十三行，这些建筑物都特别美观，这里是清朝向西方开放的唯一贸易窗口。在广州，虽然一般不把十三行称为租界，但我更倾向于称之为租界。当时这里有13个大的对外窗口，图中描绘了来自英国、法国、丹麦、奥地利等国的商馆。图中纵向有幽深的街道，位于这些街道两旁的商社与外国开展贸易。

实际上清朝的对外贸易主要有三大块：一个是广州对西方，一个是宁波对日本、琉球，还有一个是张家口对俄国。不同的商人集中在不同地区活动，比如北方的商人在西北地区，福建商人在十三行，浙江、江苏的商人则在宁波。过去我们缺少这种研究视角，但如果我们把三大港的贸易情况拿出来分析就能看到更清晰的内部经济结构。

接下来我想介绍一下广州十三行的由来。自清乾隆年间开始，广州十三行就成为了贸易港口，主要是进行西方政府于中国政府的商贸往来，属于公共设施。也就是说，这个时期的贸易采取国家独占体制的形式，我认为这非常重要。中国采用这种贸易体制超过一百年，在将近两百年的时间里这种政府独占体制不断得到强化。

到十八世纪末期，巨大的转变开始产生。英国内部资本主义得到发展，有人提出除政府之外，个人也要进行贸易，市民的要求迫使英国议会废止东印度公司的垄断体制，另外，英国内部的苏格兰商人和英格兰商人之间一直存在矛盾，即使到今天也一样。苏格兰商人开始有向外发展贸易的想法，因而有许多人来到中国。如此一来，东印度公司在印度以及广州的垄断权问题开始浮出水面。

总而言之，十九世纪初期个人商人由于英国内部的原因大量来到中国。还有一个就是美国人的出现，经过独立战争，经济复苏之后，由于没有像东印度公司那样的政府贸易公司，大量的美国个商来到中国，因为中国的茶、丝绸、瓷器的贸易非常赚钱，美国人不想让英国人独占这个市场。这样就面临一个官对官贸易崩溃的问题，造成了散商的大量出现，数量超过百人。比如，1837年就有了150多家散商。这个时候，由于对方是个人，我们也出现了个人，这就是行外商人。



图3 渣甸（左）与马地臣（右）

而在此之前，只存在由皇帝任命的行商。在对外贸易中，行商得到皇帝的批准垄断对外贸易，在对外贸易中大量获利成为了大富豪。最成功的行商曾进入世界富豪排行榜，甚至有些人还远赴美国进行投资。但是，随着时代的变化，在广州不到15,000平米的面积上出现了200多家的行外商人。行外商人并没有获得皇帝的许可，因此在清代的正史中也是没有记录的。而且，当时有300多名外国人在广州居住。按照当时的法律规定，外国商人只能在这里停留数月，做完生意就打道回府，不允许居留。然而事实并非如此，所以我们不能只关注制度史，制度史需要靠文化史中看似小的细节去补充研究。

行商和散商不断增多，贸易额也不断增加，1820年发生了散商贸易额大于行商的逆转，出现了银行，贸易越加繁盛，后来便有了鸦片战争，这才是鸦片战争的真正原因，所以研究历史我们还要从文化小的细节去探究，由此也可说这个时候已经开始进入近代了。

当时最大的贸易商是渣甸和马地臣的怡和洋行，现在已是世界屈指可数的企业。他们的生意还包括房地产及金融行业（图3）。起初，只有喜爱中国的两个苏格兰年轻人，带着西式时钟来华进行贸易，最终发展至从根本颠覆当时的官营贸易体制的程度。另外还有一些洋行也进行鸦片贸易。可以简单说，根本推翻官营体制的就是这些人。

另外，基督教新教的传入给中国造成了很大的冲击，因为它促成了新的概念的形成（图4）。在华的新教传教士一直印发各种小手册，按道理说他们是不能进广州城的，但他们每年都进广州城分发，皇帝是管不到，地方的官员稍微贿赂一下就可以了，他们每年都会去分发给那些参加科举考试的举子们，这些举子对宗教抱有多少兴趣不得而知，但那些落榜的人会看这些东西，试图从心理上找平衡，这其中有一人就是洪秀全。起初他也没有太关注这个东西，但他经过十几年几次落榜之后再看这些东西，他突然觉得自己就是基督的弟弟，所以才有了太平天国的运动。从这个可以看出，这些东西都是一点点渗透进来的，并对中国起到了天翻地覆的作用。

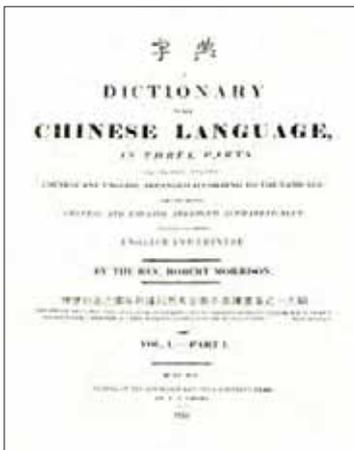
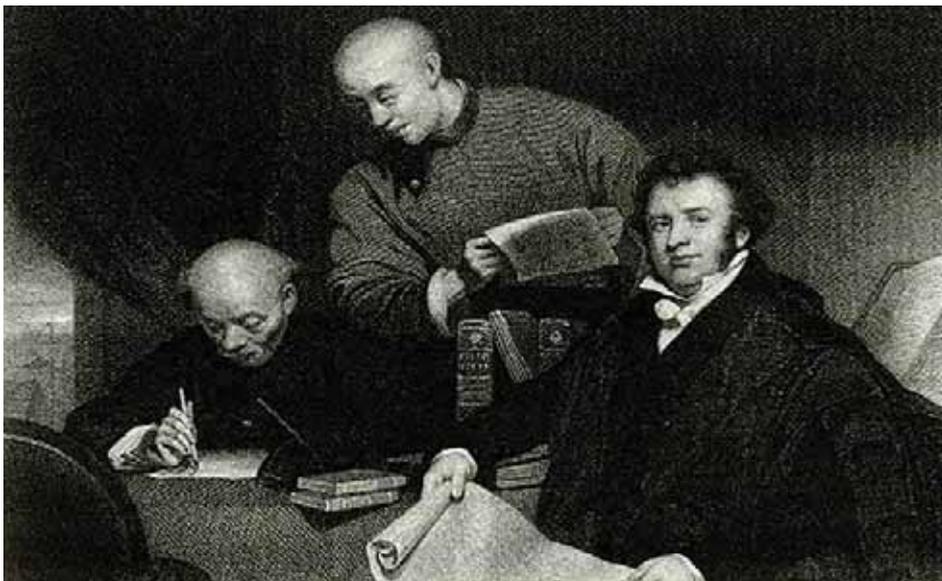
图4 广州与南洋基督教新教传教士活动一览(1807~1842)

1807	馬礼遜来華
1813	「新約聖書」漢譯完成(馬礼遜)
1813	米憐来華
1815	「察世俗每月統記傳」(中文)發行
1815~1823	「華英字典」完成(馬礼遜)
1817	麥都思、到達馬六甲
1818	英華書院創設(馬六甲、1843香港移轉)
1823	「特選撮要每月紀傳(中文)」(巴達維亞)創刊(麥都思)
1823	「旧約聖書」漢譯完成(馬礼遜·米憐)
1827	「廣州記錄報」(英文)創刊
1827	郭實獵、到達巴達維亞
1828	「天下新聞」(麥都思)在馬六甲創刊
1830	裨治文来華
1830	「中国叢報」(英文)創刊(裨治文)
1830	「在華基督教協會」創立
1833	「東西洋考每月統計傳」(中国語)創刊(郭實獵)
1833	衛三畏来華
1834	公理會廣州印刷所創設
1834	郭實獵夫人、於澳門創設女學堂
1834	廣州在住外國人「在華實用知識傳播會」成立
1834	伯駕来華
1835	十三行眼科醫局開設(伯駕)
1835	石版印刷引進(衛三畏)
1836	「馬礼遜教育會」成立
1837	馬礼遜号来日(郭實獵、衛三畏、伯駕)
1838	「各国消息(中文)」創刊(麥都思)
1838	鉛漢字(後為香港字)於新加坡完成
1838	「中華醫藥傳教會」成立
1839	馬礼遜學堂成立(澳門)
1839	「澳門新聞報」「澳門月報」(林則徐)創刊
1840	「伊索寓言82編」漢譯(羅伯聃)
1842	「馬礼遜學堂」遷至香港

关于十三行，虽然史学界不叫租界，但我把它看作为租界。实际上它作为一个小的租界，里面有十三个大的门面，包括英国、法国、美国、奥地利和丹麦等国的行商，后面有三条巷子，里面都是中国和外国贸易商人。其中最大的贸易商就是怡和洋行。当时就是刚才提到的两个苏格兰小伙子，起初向中国人卖表，一点一点的发展壮大，最后就把当时的官商体制给颠覆了。还有一个颠地洋行，主要是卖鸦片。其实他们都参与了鸦片贸易，因为这个生意十分赚钱。

1807年马礼逊来华，开始译圣经、办杂志，并到南洋一带创办学校。新教的传教士一般会以中国人或华侨为对象进行医疗或教育活动，在此之后才开始传

图 5 马礼逊和翻译助手



Action 行為、Apostle 使徒、Code 律例、College 書院、Comedian 戲子、Commerce 貿易、Communicate 相通、Company 公司、Compare 比較、Exchange 交換、Judge 審判、Law 法律、Language 言語、Lawyers 訟師、Level 水準、Library 書房、Life 生命、Logos 道、Love 愛、愛戀、Luck 好運、Manage 管理、Manifest 表著、Manner 礼貌、Natural 自然的、News 新聞、Note 記錄、Novel 小說書、Men 人類、Opera 戲曲、People 百姓、Prosecute 告訟、Reasonable 合道理、Religion 教門、School 學堂、Shortsighted 近視眼、Smile 微笑、Spirit 精神、Tragedy 悲戲、Translate 翻譯、Travel 遊學、Unit 單位、World 天下、世界

图 6 字典的封面

图 7《英华字典》的译词范例

SGRA 92 REPORT

教并创办了服务于传教活动的印刷厂，广州十三行里也有印刷厂。这些印刷厂也成为进行英语教育在内的教育活动和传教活动的据点。

他们还创办医院，比如说比较著名的有十三行眼科医院，后来不断发展，鸦片战争之后搬到广州，变成了博济医院，这个博济医院壮大之后，在19世纪末建立了学校，孙中山就是这里毕业的，可见十三行这个星星之火，点燃了中国乃至东亚近代的历史。

马礼逊编辑词典都发挥了巨大的作用，其中最重要的我认为是《英华字典》（图 5 · 图 6 · 图 7）。他身边雇了一些中国人来编这个英华词典，过去日本想学习英文只能通过荷兰文，但这部词典 1828 年传到了日本，这样日本人就能通过汉文马上看英文，因为日本人都能看懂汉文，这样就便利了他们学习英文，促进了英学的产生，所以这几部词典尤其是英华词典对日本有很大的作用，他从英文翻译概念，我们看到这里有书院、贸易、公司和法律等等，这些词至今



图8 长州藩翻译的《英国志》



图9 禪治文的《联邦志略》

还在使用。像“恋爱（爱恋）”、“小说”、“剧（戏曲）”等词汇都很先进，传到日本以后对日本知识分子的翻译理解起到了很好的作用。

1844年出版卫三畏（William）的词典，1847年出版了麦都思（Medhurst）的词典等，在1868年明治维新之前就已经有了四大词典，这些词典都传到了日本。这里还不包括那些杂志，它们对日本人理解西方的概念起到了非常重要的作用，我觉得概念的转型怎么强调都不过分。

当然这些机构，包括十三行的一部分，在1840年鸦片战争之后，全都转向了上海，因为他们觉得上海不仅在地理位置上很重要，更重要的是与日本距离也很近，还有上海后面有广大的江南文化做底蕴。传教士走向上海，这也与资本走向有关，大量的资本由广州移向上海，因为他们需要的东西在上海的周边，丝绸、茶叶等等都在上海的附近。之前必须把各地生产的東西一一带到广州，并在广州进行组合。到了鸦片战争之后，只要在上海就能完成商务贸易了。

在上海也形成了买办阶层。传教士的走向、资本的走向和买办的走向是相关的，买办是给外国人又买又办，他们和资本一样，从广州转向上海，又从上海转向日本。

这其实是很有趣的现象，在上海出版的传教士的书籍也全部和出口商品一起传到了日本。这些书籍的传播对之后的日本其实产生了非常重要的影响。比如说，长州藩翻译的《英国志》（图8）就是英国史，禪治文的《联邦志略》（图9）写的其实就是美国史。

买办一部分人也去了日本，所以日本有中华街，这些中华街大部分都在外国人居住区的边上，这就起源于十三行，有外国人就要有中国人给他们办理业务、理发、做衣服，因此中国人也是随资本由广州、上海走到了日本。

【2】语言：近代日本文体的形成

不光是书籍，传教士的文体也是很重要的，我们看到这个文体已经十分简单了。因为这些传教士是外国人，在广州时就学习白话文，为了让中国的百姓和官绅都能看懂，就把汉语进行拆解，使它简单化了，这个汉文就不是四书五经的汉文，而是简单化的汉文了。这种简单化了的汉文传到日本以后，对日本的明治维新产生了很大的影响，明治初期所有的汉文都是借助这种被拆解被解构了的传教士式的汉文，所以我就要涉及文体的问题，日本近代文体的形成是在传教士汉文的影响下形成的，这个观点可能会遭到语言学家的反驳，但我是从文化史角度来讲的。

这要上溯到广州、上海时期，与传教士出版的汉译西书有关，这些书内容非常新颖，受到了明治时期知识分子的欢迎，因为他们从中得到了大量的信息，这就出现一个状况：幕末到明治初期所有的游记日记都是用汉文写的，这与以前尤其是江户时期是不一样的，我觉得江户时期汉文是一种教养，知识分子用汉文进行思想的交流，但到了明治时期，汉文成为一种实学，成为了标准语。这个时期的汉文体得到了文艺复兴一般的振兴，成为了近代日语的母体。具有公用的作用，它渗透到了下层，形成了新的汉学。

举个例子，图10是明治天皇颁布的教育规范《教育敕语》，大家可以看一下。不懂日语没有关系，你把假名去掉，调整一下语序中国人应该也能看懂了。他就是用汉文来写的，这就是标准文体。

而江户时期使用的侯文，虽然文字是汉字，但完全看不懂是什么意思，因为他是日语的顺序，用日语的文法写成的，当时幕府发通知就用这个文体，这是江户时代的标准语、共通语（图11）。这种文体在明治时期就被否定了。

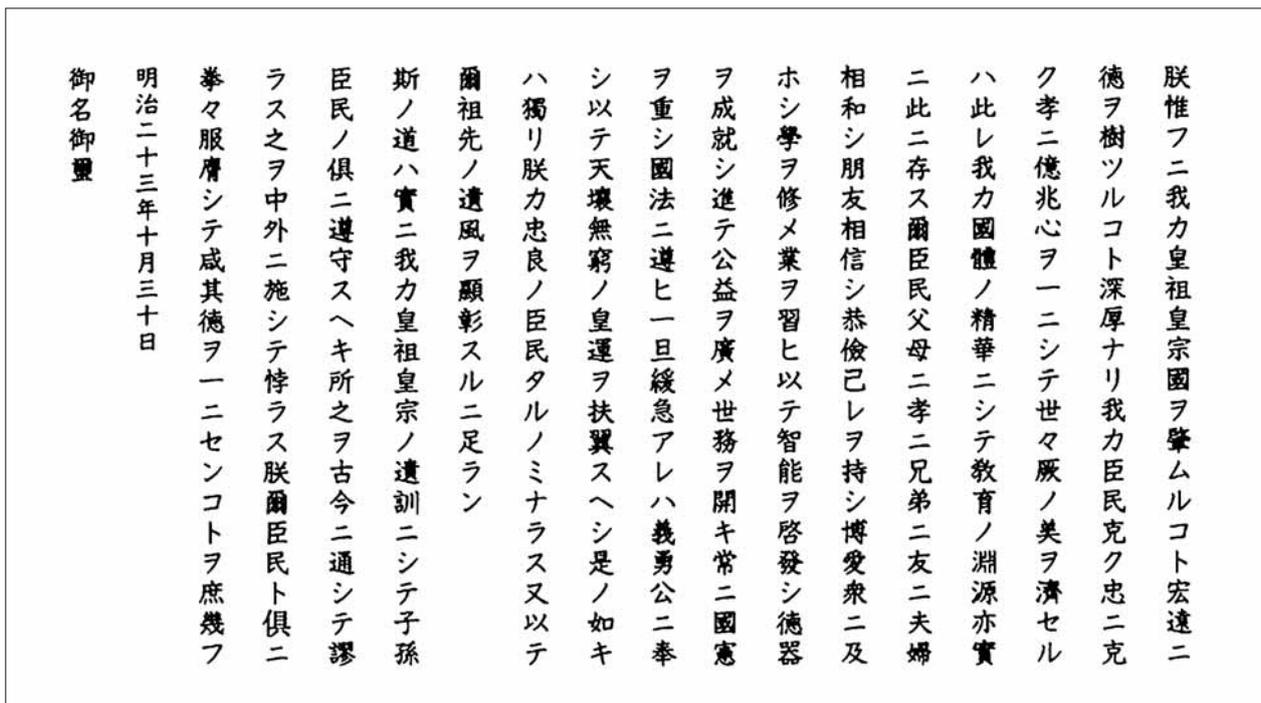


图10 教育敕语

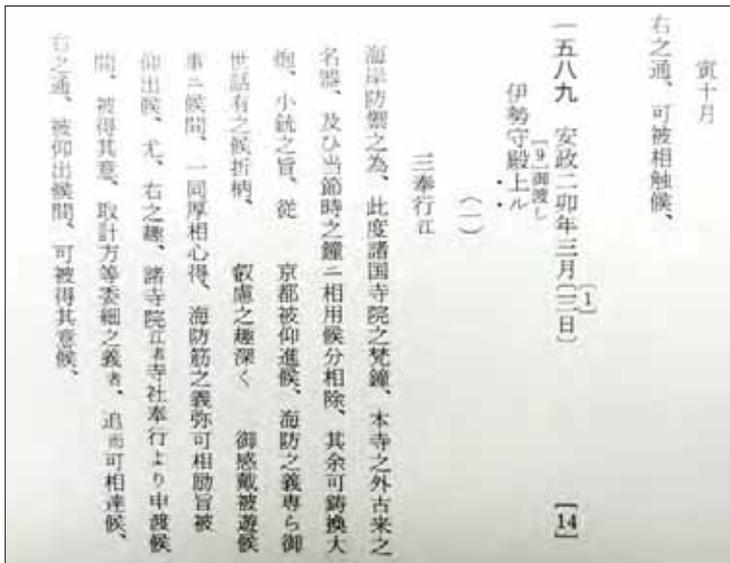


图 11 江户时代的公用文体—侯文（幕府告示-御触）

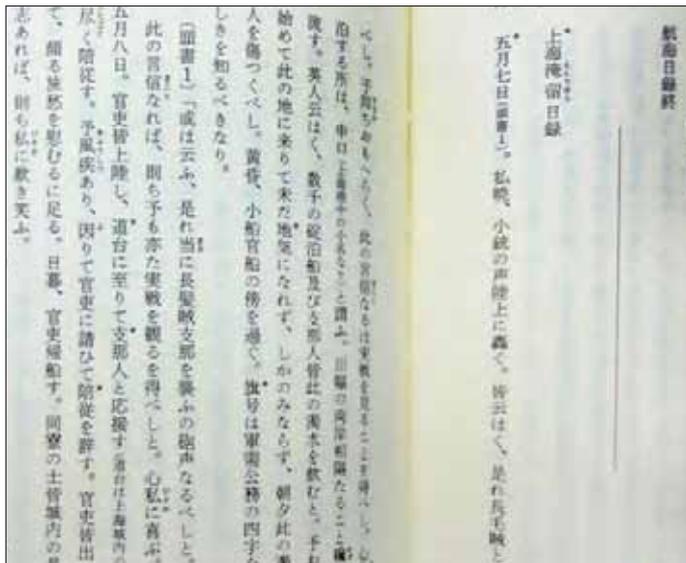


图 12 幕末维新时期文体游记、日记（高杉晋作，1862年）

比如说当时著名的知识分子——高杉晋作到上海就是要用汉文来记述行程，这个时候他的旅游完全用汉文来表述“上海淹流日记。五月七日。拂晓...”（图 12）。中国人即使不懂日语，但当成中文来看的话还是能看懂。他不管是旅行，还是记录，用的都是汉文。

还有一位幕末的外交家成岛柳北，他在幕府时期担任外交大臣，明治时期不干了，到处旅行。他写了一本《航西日乘》，记录去欧洲的旅游，用的同样也是汉文。还有森鸥外同样用汉文写了《航西日记》，福泽谕吉也曾写下“天不造人上人，也不造人下人”的名句，这句格言也是依据汉文而成的。

汉文体进一步简化，形成了现在的日本文体，我不是否定日本文化，妄称日本文体是从汉文转化而来的，但可以说日语母体的一部分就是中文（汉文）。有日本留学经验的人可以去看，日本的医书、法律书和军队用语的很多术语都是汉语，从用词也可知道刚才的结论。都是用汉文体写的，因为他们对传过去的这些种类的书最感兴趣，比如说法律界所说的“六法全书”基本都是用汉文体写的。我认为这很重要，为什么会出现这种情况？因为日本人说汉文体具有叙事功能并且汉文逻辑性较强还具有构造性，容易造新词，有丰富的典故还有大量既成的概念。

简单举几个例子：当时的评论家说“和文与汉文相比不可同日而语，比较之下，巧拙、粗细、精美高下立见”。大家都的中村敬宇说过“要学洋学必先学汉学，学过汉学再学洋学的要更胜一筹”。直到明治中期，他仍然强调汉学不可废，所以洋学是乘着汉学的东风来到日本的。

后来梁启超等人通过翻译政治小说，推广日语速读法将这些理念又传回中国。也就是说，中国的古汉文经过传教士的拆解又经过日本人的拆解重建，再传回中国，才有了清末时期的新文体。

SGRA 96 REPORT

从日本传回中国的新概念，新文体又促进了五四的产生，可见语际旅行是多么重要，对五四运动和白话文的产生起到了重要的作用，不仅是词汇间的语际旅行还是文体间的旅行，对自我否定有重要的作用，这是两国关系契机的特征。

《变法通议》、《论学日本文之益》写的是梁启超为何要主张新文体，为何要学习日语。在梁启超看来，如果只是想单纯看懂日语的话，十天就足够了，把假名去掉就能看懂。

他还翻译了许多政治小说，尽管现在研究说不是他翻译的，但至少是以他名义出版的，现在我们比较一下原作与译作，把假名去掉，两篇文章没有什么区别当然语序有些变化，其实他就是这么翻译的。这个东西传到中国来，对新文体产生很大作用。

梁启超还在横滨创办了《新民丛报》《清议报》，在《清代学术概论》的结尾处，他写道“学者竞效之，号新文体”。将日本的新文体带到中国，这算是梁启超的一大贡献。

【3】自我认同

下面我再讲一讲自我认同。刚才吉川先生在致辞中提到，中日之间需要一面镜子。从古至今，无论中国还是日本的自我认同都需要这样一面镜子。自我认同的形成确实需要一定的参照物。

对于近代中国来说，这面镜子就是日本，中国的自我认同也是借助日本才形成的。

另一方面，近代日本一直是以西方为镜，但它一直存在一种劣等感，认为自己方方面面都不如西方，但他看到中国和朝鲜之后，又存在优越感。因此日本人也形成了疏远中韩，效仿西方的近代观。也就是说，通过与落后于西方近代观的中国、朝鲜半岛作比较，日本人获得了自我肯定的自信。与此相对，中国以日本为镜进行自我认识，通过日本描绘了自画像，通过这个比较，中国意识到了自己存在的许多问题。

甲午战争以后，日本的自信增强了，所以在甲午战争、日俄战争期间出现了大量的日本人论。新渡户稻造的《武士道》、冈仓天心的《茶论》还有芳贺矢一的《国民性十论》，影响深远。其中关于国民性的表述都是什么近代国家啊、勤劳啊、讲卫生等等，这些文章就在日本最大的杂志《太阳》上发表，受到反复宣传。

反过来，他们会说，支那的国民观念多么淡薄，懒惰、邋遢，而日本的国民观念多么强，日本就是一个万世一系的国家，而中国连基本的国家概念都不懂，不懂得国家与帝室的区别，国家与王朝的区别。因此，他们强调日本是近代国民国家的典范。

另外他们还强调讲卫生和勤劳的观念，由此可以看出日本人的五大特点之

一，就是爱清洁。他举例子说，随军记者到东北后说东北的脏乱程度难以用语言来形容，相比之下日本是多么干净。

当然这其中有些制度上的操作，但梁启超开始接受这些东西，到了日本后，他就发表了一系列对国民性的议论。在《中国积弱溯源论》中，发表了一些与《太阳》上十分类似的观点，列举了中日的差异，国家观念的差异，认为中国人不知“国家与天下的区别”、“国家和朝廷的区别”、“国家和国民的区别”。

还有他找了六大原因，认为中国人“非常奴性、非常愚昧、非常自私、非常好伪、非常怯懦、非常无动”，而这些都是《太阳》杂志等批判中国的言论，梁启超全盘照收，写入其著作。他们还批判中国人没有凝聚力，但其实日本的凝聚力是到明治中期才开始形成的。

【4】文学

下面我就简单说一下文学，晚清小说超过千册，而翻译小说就占了三分之二。从日语翻译过来的小说，例如梁启超倡导的政治小说，就属于专门的种类。

这些翻译小说对文学具有新的含义。这时文学创作的概念就有所改变，最初主张“文以载道”，思想尤其重要。这里的文也指诗文，而到了梁启超活跃的近代，因为受日本影响，他认为小说很重要，在观念上把文学的关于诗和小说的内涵进行了颠倒。

梁启超在小说中肯定了文学的正统性，认为西方的主流都是通过小说来表现思想和内涵，所以要把这些小说翻译到中国来，我们就可以看到，在他付诸实践之后，日本的政治小说在中国大量出现。

还有一个是五四运动，虽然在表面上这是一个反帝的新文化运动，但看其文化内涵实际上是非常亲日的，或者说其内容大部分是从日本过来的，在这里我想特别强调一下周作人的《人的文学》这篇文章。这里有几个发现，一个是人的发现、一个是妇女的发现，一个是儿童的发现，还有一个是恋爱的发现。刚才所说的这些，都是像他这样的有留日经验的五四知识分子从日本引进这些概念之后才被明确下来的。而胡适等留美的知识分子主要是在新文化运动中提倡了一些，但更多地付诸实践的是周作人，这里有周作人的研究专家，一会儿可以深入的探讨。

还有一个比较重要的概念就是阶级的概念，其实在早期翻译共产党宣言时已经有所涉及，但直到1921年共产党成立后，其中的青年一派非常喜欢强调阶级，所以后来才有毛泽东用阶级的概念对农民进行分析，我们用文学的概念来看这个问题，大量日本的无产阶级文学作品被翻译到中国（图13）。

这对于中日文学的关系发展来说非常重要。通过五四运动，我们接受大正文学，特别是白桦派的文化的内涵，开始以肯定的角度去看待人。就在我们刚刚开始发掘这些文学的内涵的时候，日本的文学突然转向了，出现了大量的左翼文学，

图13 阶级的“发现”

20年代后期至30年代前期中国所翻译和介绍的日本无产阶级文学著作（理论部分）

《文学之社会学的研究方法及其适用》平林初之辅著 林亏葵译 太平洋书店 1928年3月

《新兴文艺论》藤森成吉著 张资平译 联合书店 1928年12月

《文学之社会学的研究》平林初之辅著 方光焘译 大江书铺 1928年12月

《近代日本文艺论集》韩侍桁编译 北新书局 1929年2月

（收录有林葵末夫《文学上之个人性与阶级性》，平林初之辅《民众艺术之理论与实际》等）

《现代新兴文学的诸问题》片上伸著 鲁迅译 大江书铺 1929年4月

《新写实主义论文集》藏原惟人著 吴之本译 现代书局 1930年5月

（收录有《作为生活组织的艺术和无产阶级》等）

《新兴艺术概论》冯宪章译 现代书局 1930年7月

（收录有藏原惟人《意识形态论》，青野季吉《新兴艺术概论》，小林多喜二《新兴文学的大众化与新写实主义》等）

左翼文学开始流入中国。左翼文学主要是关注群体关注社会，而先前传来的文学主要是关注个体、个人，也就是说，我们刚刚开始关注自我的时候，突然左翼文学、无产阶级文学的第二个潮流过来了，我们又重新开始关注社会与群体了。

这样我们与日本就产生了距离，因为日本经过明治大正时期长时间的关注自我，对自我的发掘，才有后来的无产阶级文学，才有后来的大江健三郎、村上春树的文学。而我们的文学发展突然被切断了，从人的文学转向了左翼文学，中间出现了一个断层。

这一时期，还有大量的来自日本的精神上和物质上的影响，比如说内山书店，我借用一下北京外国语大学的秦刚老师的调查，内山书店每年售出八万册日本书，有三分之二是中国留学生来买。虽然白桦派文学在中国流行时也是如此，但无产阶级文学迅速大量进入中国也与内山书店等物质条件的支持息息相关。郭沫若很强调留日人员的作用，他甚至说五四运动是由留日的中国学生发起的。

【5】旅行

我再强调一下旅行，以前我在南开大学工作时，有人提出要创设旅游专业，我非常反对。但现在我开始觉得旅行对人的观念有很大的影响，旅行对人的审美观等都会产生巨大冲击。

在我的中日200年史观里，在一九零几年时，随着铁路和桥梁等各种交通工具的发展，旅游机制逐渐形成，人的大量移动随之开始，亲赴现场进行考察成为可能，在此过程中JTB公司发挥了重要作用。

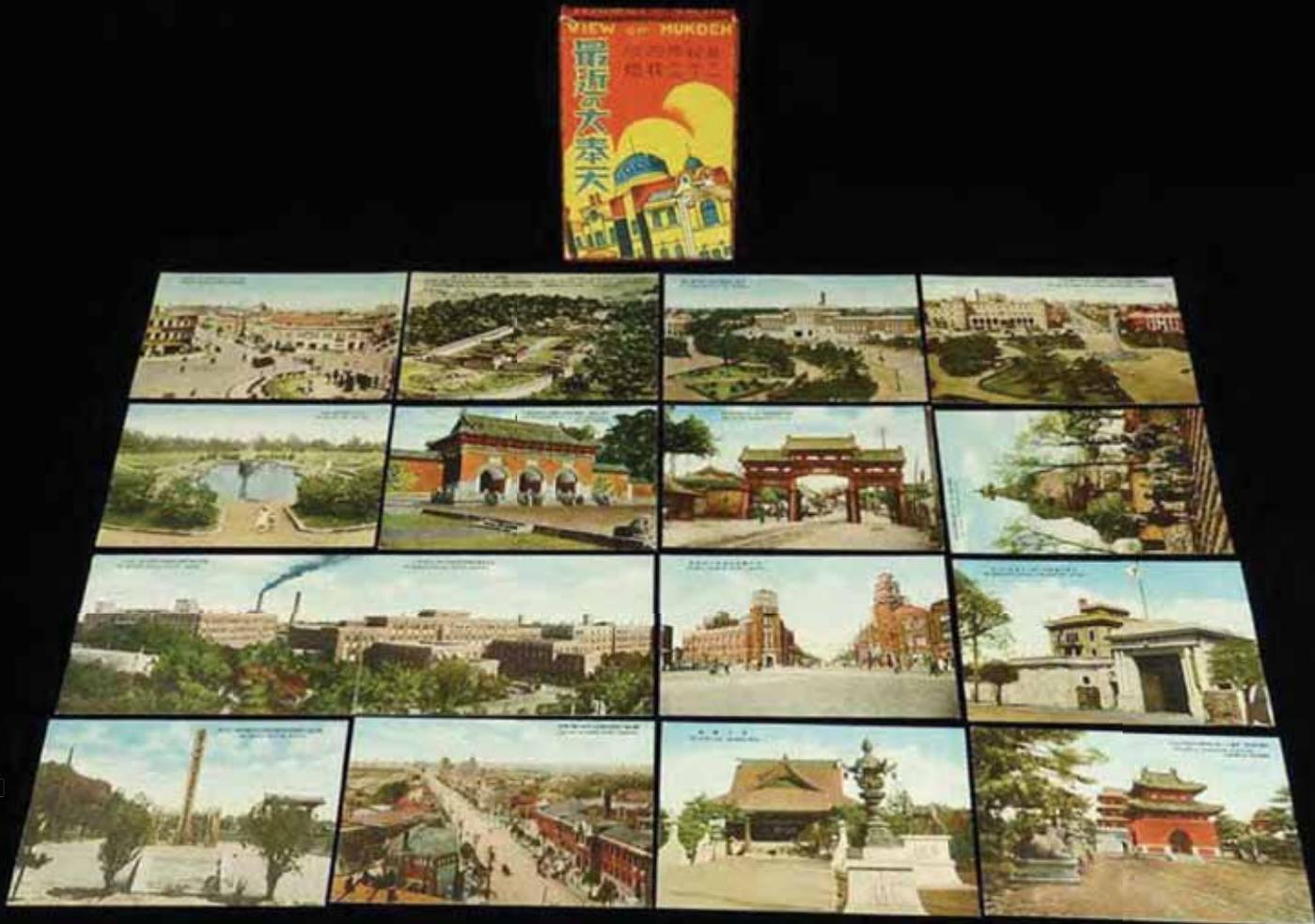


图 15 被包装的沈阳明信片

旅游的场面。所以大部分的北方城市的选景与日本20世纪30年代的选景基本是一样的，就是因为当时为了日本人等外国人选的景至今影响着我们中国人。

【6】文化 I

下面我再简单提一下文化。历史上有“上青天”的称呼，就是上海、青岛、天津。当然我刚才谈到要加上广州，后面还要说加上大连，那就要改了叫“上广大青天”，在这5个城市里我们可以寻找中国近代性的脉络。

这些城市的发展与空间的扩展息息相关。大连就是与前面讲到的帝国的扩张有关系的，其后的城市建设都是以大连作为范本，首先是俄国占领时期的大连，当时俄国比较崇尚法国巴黎，就以巴黎为模板建设了大连，可以从图上看到放射式的道路等等（图16）。到了日本统治时期则加强了这种广场和道路的文化，有了转盘等等，把警察政府等非常有话语性的机构建设在广场周围，强化其殖民权力，从中可以看出这种操作是十分有计划性和全面性，这种模式扩张到了其他城市。



图 16 大连中心放射线道路（环形交叉）



图 17 早期奉天市街区图

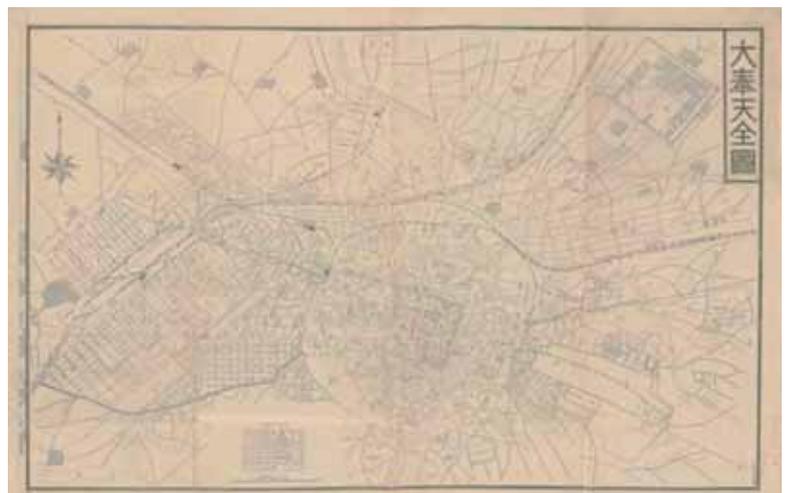


图 18 后期奉天市街区图

这是沈阳的一张图片，有老城和附属地（图17·图18）。附属地就是按照大连的模式建设的，有放射式的道路和广场，一点一点把传统的原有的城市吞没了。

小城市也是这样，我生活过的辽阳本来是方形的老城，后来被附属地吞没了，变成大连式样的城市。还有长春，虽然后来日本战败了没有完成，但看这张规划图，可以看出是非常整齐的大连模式的城市规划。

【7】文化 II

“殖民地的近代化”由沿海渗透到了内地，后来就渗透到了张家口，也就是2020冬奥会的主办地，当时叫蒙疆。日本向张家口的移民有4万人，上海有10万人，大连有10几万后来增加到20几万人，当时整个满洲有150万开拓民。这些城市的移民人口之多有目共睹。但日本向张家口这个城市移民了4万人。现在看来简直是个谜。

我觉得是因为这里距离苏联、蒙古比较近，有比较多的可以开拓的地方，而



图 19 张家口 : 新市街地



图 20 张家口 : 旧市街地

从传统贸易的角度讲，日本也是非常重视这个地方的（图 19）。通过对张家口的观察，我们可以看到当时日本人是如何定位中国的贸易基地的（图 20）。日本人很重视对蒙古，对苏联的关系，因而很早就建立了领事馆。

另外，就像线路图显示的那样，日本人在占领华北之后，通过铁路连接起全境（图21）。张家口和内蒙古的商务往来都在日本人的监控之下进行。

日本人把三井等洋行带到了这个地方。这是当时的地图，在老城之外，他们建设了新城，占领华北之后又把铁路修到了这个地方，产生了很大的影响，比如说石家庄，起初他就是一个村庄，但后来随着日本的侵略占领和开发，逐渐发展变成了一个省会城市。

再来看一下明信片，明信片主要是反映景观的变化，日本人为了强调殖民成果，制作了许多明信片，通过明信片占领前与占领后、新旧城市



图 21 张家口铁路线路图

对比等变迁都能一目了然（图22·图23）。

从中可以看到日本国民把张家口看作准国土的认识，我们可以看到有“大好河山”、蒙疆政府、旧城等等反复表示的景观，还有铁路以及他们引以为傲的北支最好的公路桥，另外他们还建设公园，并且命令进行口外交易的蒙古人和汉族



图 22 张家口的城门

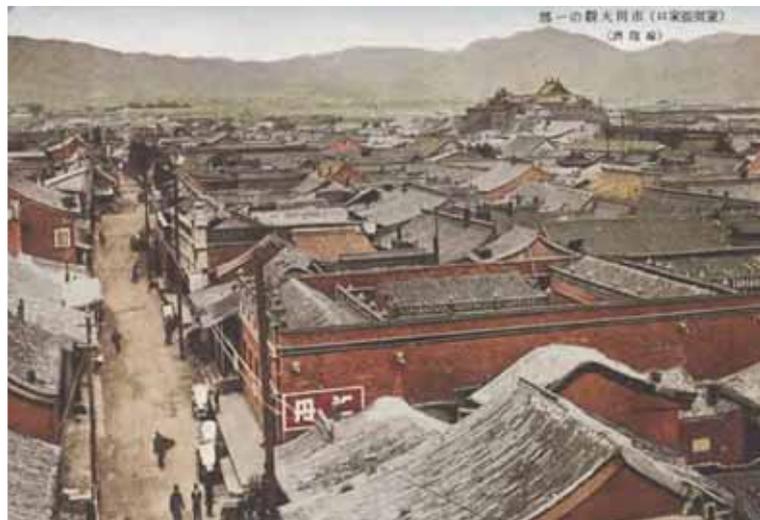


图 23 张家口市街



图 24 张家口日本领事馆



图 25 张家口场外

SGRA 9th REPORT

人可以在哨兵的监视下进行交易，以便维护贸易的秩序，他们还建设了很多基础设施，比如说至今仍然保留的车站。这是一些图片：羊毛的交易、日本的领事馆的图片等等，从上面那张照片中可以看出日本对张家口的高度重视，其他地方的领事馆都很简朴，而张家口的领事馆却非常气派（图24、图25）。

此外，在明信片的系列作品中，日本人十分直白地强调新旧城市的差距。图26是蒙疆政府，图27是中国旧政府（蒙古联合自治政府）。从画中很清楚地可以看到日本人这种意图，他们刻意地宣传日本人的建筑比较气派壮观。

这样的明信片盛行之际，张家口也成为绘画创作重要的主题之一。这个时期有很多日本画家来到中国，留下了许多描绘风景的作品。比如说深泽省三，他是出身于日本东北的油画家，在张家口画了许多后印象派的画（图28）。



图 26 张家口蒙疆政府



图 27 张家口蒙古联合自治政府



图 28 深泽省三的作品

结语

最后用几分钟进行总结，我们为什么要把东亚一起看，其实我是想强调东亚在时间和空间上确实具有一体性。

接受西方文化是东亚共同经历的过程。西方文化具有两重性，一个是侵略性，另一个是启蒙性，在批判西方文化侵略性的时候不能无视接受文化的共同过程和共性。

东亚内部也有西方（新）与东方（旧）的概念的比较与对立。在东亚内部，日本承担了所谓西方的地位，而其他被侵略的殖民地区成为了东方，也就是说，除了东洋与西洋的对立之外，东亚内部也有东方与西方的对立比较。

从结果上看，最终各国都接受了西方文明，但是其过程错综复杂，同时还造成了许多人的痛苦。因此，我们不妨打破传统的一国史观，从地域史、文化史的角度来观察这段历史。那么再来看待文化力的时候就拆解了包括外交、军事、政治等其他要素，让我们能够更加客观地看待这200年的历史。我的报告就到这里，可能多花了十多分钟，感谢大家在大雪天里听我胡说一通，实在不好意思，谢谢大家。

讨论

讨论主持人

王中忱
(清华大学中文系教授)

讨论者

王 京 (北京大学日本语言文化系副教授)

刘晓峰 (清华大学历史系教授)

王 成 (清华大学外语系教授)

董炳月 (中国社会科学院文学研究所教授)



点评

王中忱 (清华大学中文系教授)

我是清华大学中文系的王中忱，我们非常感谢刘建辉教授所做的内容十分丰富的讲演，刘教授从概念，语言，自我认同，文学，旅行，文化等六个方面，对中日近代两百年，既从 1810 年基督教传教士来东亚以后的时间，就中国西方日本三者的相互影响以及进入 20 世纪以后 日本文化对中国文化影响的话题展开了演讲。

近些年讨论中日关系的书很多，但据我所见大多数是从十九世纪末尤其是 1894 年或 1895 年开始的，刘建辉教授把历史时段放长，讨论二百年间的中日关系，我们可以看到刘建辉教授主要是以一个全球史观来认识的。

我们知道近代前中日关系是在中华世界和朝贡贸易体系中的，日本不在朝贡贸易的体系中，但当时东亚间国际关系的体现就是用这个朝贡贸易发生怎样的联系，但是正如刘教授指出的那样，到了十九世纪初，这个事情发生了一个很微妙的变化。

变化就是广州十三行。这个来自西方的贸易体系开始对东亚产生巨大的影响，这个变化来自十三行内部，传统上讨论西方列强，西方资本主义时，一般

分析认为这种影响限于内部，而对于外部的影响十分有限。但刘建辉教授注意到西方贸易体系的内部发生的变化，西方恰好经历了一个从垄断资本主义向自由贸易体制转换的过程，那么这样一个体制如何冲击了东亚内部的体制，带来了东亚内部的变化，刘教授不仅注意到政治军事外交上的问题，他今天讲演的重点放到了文化扩张、文化转换，我们就知道传教士所带来的这个概念如何先进入到中国的国内，但是在半个世纪中间并没有发生特别大的连锁型的反应。

但另一方面，传教士在日本造成了一个特殊的影响，又以日本为中介传回来，进入到晚清中国的脉络里产生一系列连锁的反应，这样一些非常详细、微妙的变化就带来了现在近代世界的形成，我自己听了之后非常受启发。

另外我觉得刘教授讲的几个重要空间也非常有意思，从广州到上海，最后的结束是在张家口，张家口离北京很近，两年以后张家口到北京的高铁开通，从北京去只需要四十分钟，这么近的地方却往往在我们的视野之外，我想刘建辉教授的安排是有深意的。我们往往关注的资本主义的全球扩张是海路上的扩张，而对于陆路上的扩张带来的变化关注的很少。资本主义扩张并非是仅仅通过海陆席卷而来的，像张家口这样的中国北方地区也受到了西欧的影响。张家口是连接欧洲与亚洲的通道，从俄罗斯蒙古的路线究竟带来了什么，这个好像是我们以前的历史研究很少关注的，刘教授在讲演的结尾提起了一个很有意思的话题，我就不多占用时间了。

指定讨论

1

王京（北京大学日本语言文化系副教授）

大家好，我是北京大学日语系的王京，今天在座的都是非常重要的学者，能够有发言的机会，我感到非常荣幸。首先我认为刘建辉教授的著作《日中二百年——相互支撑的近代》和这次演讲都有十分强大的现实意识，可能在内容中没有写的太多，但在前言和后记中写得非常清晰，就是中日间的隔阂到底从哪里来？这里可能有现实的政治问题，可能有国民间的感情和喜好问题，可能也有媒体报道的偏向的问题，但是刘教授把这个问题与知识分子等社会精英的作用相联系，并去追寻造成这种状况的历史渊源。

我们知道现在造成东亚地区相互之间隔阂较深的原因就是所谓的分段体制——战争和战争之后的冷战体制，如果我们从战争和战争之后的这个体制去研究就会得出一个大致相同的结论。

但是刘教授的研究更迈开了一大步，扩展到了战前，把整个近代化的进程

纳入到视野当中来思考。我认为从中日两百年的进程来把握，是把业已形成的历史分段重新进行了划分，但是重新回顾历史的话，在完整的历史发展当中，中日两个国家有着非常紧密的联系。形成这样一个分段需要几个要素，一个是要割裂原有的联系，重新为它赋予意义，第二个是体现在历史社会发展的过程中，还有一个是国民国家的发展中，国与国之间的范畴按照国民国家的范畴重新割裂开来。其实从近十年到二十年的历史学研究以及中国社会、日本社会的发展来看，各个研究领域都有突破原来的框架的欲望，比如说强调连续，在日本强调对日本帝国文化的重新审视，还有刘教授提到的很多包括城市建设的问题、旅行的问题、文学的问题、越境的问题，那么形成现在的国际化要素在当时的帝国的背景下已经有了很多的准备或者说是萌芽或胎动，这是日本学界的一个潮流。

从关系的角度来看，两国的文化交流史一直是两国学者关注的重点。但以前的研究比较单一，比如说研究五四以后的两国关系，就只关注当时，以此为基础进行扩大研究，将中日两国对对方的相互影响进行综合考察的研究相对较少。刘教授研究最大的特点就是将这些融汇成一块，既关注历史上的连续性，又关注国与国之间的整体性，这就使得中日两百年成为一个整体的框架，使得这个二百年成为整体的亚洲对应西方的文明或冲击的大问题。

我从刘教授的演讲中得到很多启发。一直以来研究近代以后的中日关系时，我们都强调日本对中国产生了很大的影响，但是北京大学的王晓秋教授却研究了鸦片战争后中国对日本的影响，在这方面迈出了一步，而刘建辉教授更进一步把传教士的作用纳入研究的视野。实际上近代之后通过这些渠道从中国传到日本的事物还有许多。

刘老师的研究让我们清楚地看到一些日本传到中国的东西实际上以前是中国传到日本的东西，这样一来，历史成为一个个贯通的整体，历史的图景更加清晰了。从国民性角度上看，以中国、朝鲜为参照，日本民族形成了自己的民族认同，这是一个反转的过程，并且这种反转通过留学被中国的知识分子内化了，形成对中国国民性的理解。

这两百年其实也是一直面临着对欧洲的问题。一个是整个亚洲对西方的问题，一个是亚洲内部的对立问题。日本对西方存在物质对精神的问题，而亚洲内部，日本无论在物质上还是在精神上都认为自己是优越的。战后进步派的知识分子竹内好把精神方面扭转对来，想把中国变成新的方法或资源重新纳入到日本的思想体系中去，但是结果没有成功，也就造成了思想的断层。很遗憾，由于文革这个思想资源消失了。

从自我认同的建立上可以看出来中日的共同点，无论是中国还是日本，在近代化的道路上，都存在一个结果至上的思想负担。因为甲午战争中国失败了，那么日本就是正确的，所以为了学习西方就应该加快脚步，虽然因为文革，近代化被中止，但从亚洲整体历史上看，都是在接受西方文明冲击中谋求自身的发展，这一特点可以说限制了其他方面发展的可能性。

另外，中日的相互认识中存在对象国主体性缺失的共同问题，日本人看中国看到的并不是真正的中国，如果从正面上理解的话是对中国的憧憬，如果从负面上理解的话是对中国脏乱差懒惰等等方面的蔑视，或者说某一方面可以翻转过来，成为所谓的中华趣味或者乡愁，在这本书里都有很多的论述，实际上现实中的中国和实际上的中国的印象在日本具有双重性，一直到现在日本国民对中国印象调查中，日本国民对中国的古典中国的传统文化评价都比较高，但对现实中国的评价都很低，这表明这种双重性一直存在。

实际上中国人看日本也存在这种情况，在近代以前一直把日本看作化外之地。后来对日本主要有三种评价：一种是认为日本向冰箱一样保存了中国的古典优秀文化；第二种认为日本是西方文明传入的窗口，但总体上并没有什么太高的评价；第三种是后来日本的经济发达后认为日本的技术还是不错的。但翻转过来，对日本国家，日本民族的主体性的评价并不是很高，所以中国看日本也存在一个双重的标准，一个是现实中的日本，一个是想象中的日本，中国人有一种认识，认为今天的日本基本上都学习西方，说起当代日本也不过是发达的科技而已。双方都存在的这种双重标准造成了两国出现一种脱离现实认识对方的倾向。

但是为什么二百年前仍然能够进行这种文化的交流呢？刘教授向我们解释，这是因为两国存在共同的教养体系——自古就有的汉字、共通的古典文化。但随着时代的变化，这个体系逐渐崩溃，失去了共同的基础。如今刘建辉教授提到说要构建东亚的结合点、共通点，那么这个结合点如何来找，如何在基础已经变化的情况下，寻找新的共同的教养体系？这是双方学者要讨论的重点。

我个人觉得，为寻找这样的结合点，中日双方必须有共同的目标和意愿。如果双方没有共同目标的话，看任何东西都会有所取舍，只看消极的或者看积极的一面。比如单看这篇文章的话，就可以理解为日本的殖民为当代中国的发展奠定了基础。而反过来看的话这本书就变成了另外一本书。在谈到文化的时候如何看待政治军事的问题，在日本殖民时期，他们修建铁路工厂等设施，当时他们的目的是很明显的，贸易体制也是如此，虽然也是自由贸易，但毕竟只是个人层面。而我们应该关心其背后是否有政治军事的目的。

但在战后 60、70 年，处于现在的和平年代，完全可以把殖民时代的目的和意图的颜色进行脱色，使历史事实变得无色透明，变成一个客观存在的结果。刘教授正是从文化的立场来观察这 200 年的历史。那么在中日关系发展中还看不到结果时，如何看待军事政治和文化的关系是我想和刘老师想继续讨论的问题。这本著作的副标题是“相互支撑的近代”，在近代化道路上，中日近代化的进程还没有结束，我们要认识到中日之间不可分割的我中有你，你中有我的关系，比如说现在存在的可以互不相关的想法是一种虚妄了，比如说中日之间必有一战的想法也是愚蠢的，这是我的发言，谢谢。

指定讨论 2

刘晓峰 (清华大学历史系教授)

我是清华大学历史系的，主要研究日本史，2013到2014年有一年在京都的日文研，和刘建辉老师就二百年史观有过很多交流。今天听了刘建辉教授的演讲，又有很多感触，我们做学问的人在一点上能有所突破有所发明就非常难得，而一个体系化的东西能有所突破就是更难得的了。

今天是一个很好的学习，刘建辉教授在这本书中提出一个新的框架，比如说他把欧美文明作为一个他者，把东亚二百年历史发展与外来文明的对比中。我觉得这就是一个非常有意义的看问题的视角，而视角变化会带来结论的变化，它主要提到几个视角，一个是大清帝国的衰败，一个是日本帝国的发展，造成东亚内部的交叉，这种交叉带来观念和文化的回流。这个框架非常有意思，超越了单纯的国家与单纯以西方文明为中心的历史叙述，东亚的历史有了其他叙述的可能性，我觉得这个意义非常大。

那么他在具体的展开以后，很多地方具有启发性，有很多的方法。我经常讲一个视角的变化往往会带来一个事件本身意义的变化，没有视角的情况下一个事件往往缺乏太强的说服力，比如这里有一个非常有意义的知识点，就是明治汉文体的价值，这个东西我们在史料里接触很多，但如何去认识它，或者说怎么去评价它，随着观察视角的变化其意义也会发生变化。观察视角发生了变化，史料也能焕发活力。我觉得建辉兄用两种文化的比较中去评价，一定有很多很新的东西。还有刚才讲到的旅行和明信片，如果没有一个新的框架去认识的话是很难有所发现的，所以不从文化史的角度看这些东西的意义是看不出来的，一个新的文化是角度的出现意味着我们习以为常的史料的重新发掘，所以我本人感到收获很大，今天的演讲是多元综合的视角，这里牵涉到人的移动、人口移动、城市建设、广场文化，比如说张家口建设，从我历史学的角度看，感觉这是建筑学研究的范畴，但放在这个框架里面就很有意义，所以我认为从方法论上给我们很多启发，哲学研究的只看概念，文学研究的只看文学艺术，而想要理解文化，就要有这种多元融合的视角。

还有一个就是我感觉这是一个非常新的视点，我自己在这方面有非常深的感受，我今年在清华大学开了一门叫“亚洲文明与史料研读”的课。课的名字比较大，为理解亚洲的文化、亚洲的历史，我把亚洲用汉文写作的史料，比如日本的《古事记》韩国的《三国史记》《李朝实录》越南的《大越史》放在一起，和学生去讨论，因为我在日本史的研究中感觉到东亚作为整体的存在。

一位京都大学的教授写过一本书叫《隋唐帝国与东亚》，里面说世界史并不是从我们这个时候才有了国际化视野的，其实在前近代已经产生了这种观

点。那时就存在很多的文明圈，比如说中亚是个文明圈，印度是个文明圈，暹罗是个文明圈，东亚就有一个以中国文化为中心的文明圈，在这个文明圈中就有很多自身的逻辑和内容，我觉得东亚不仅是一个历史还是一个现实，所以今天研究的意义不仅在文化史的层面，还有更宽阔的文化空间。

我举一个我关注的文化遗产的例子，比如说中国与韩国因为端午节爆发了一个很强烈的争夺，起因就是中国与朝鲜半岛共同拥有的端午节，古代端午节的习俗传到朝鲜半岛，固定下来也产生了许多变化。人家用了将近两千年，你还说是你的，你要是个朝鲜半岛的人话心里会很不舒服。中国和越南之间也存在这样的问题。古代的琉球王国、越南，好多文化是共享的，联合国教科文组织的评选是按照民族国家的框架来评选的，要使用单纯的一国观点看的话，就要把原来东亚一体化的东西全面切割，这就造成了东亚的分裂，但是我们东亚各国具有很多无法切断的共同点，必须把东亚当成整体考察，这是我们思考民族未来的出发点，这个点非常重要，就拿端午节来说，世界上有多少个民族过端午节？欧洲和美国是不过端午节的，而有一个和你一起过端午节的民族，是多么值得庆幸的事。而你却要和他打仗，这是我们思考方向的错误。

还有一个就是我觉得中国的知识体系到了一个需要转折的时候了，近代以来的知识体系就是用欧洲的知识体系把我们的知识进行重编的过程，包括建辉兄讲的概念的传播都是这样的过程，但是以中国为代表的东亚文化圈的知识有自身的逻辑与概念，这些恰恰是中国要重新再出发时应该认真整理清理的东西，今天的讨论对这项工作就十分重要，我们有中国哲学史，但认真思考一下，我们是用西方的那套概念对中国哲学思想进行了切割，而有很多东西其实是无法切割的。如此一来就会造成思想的残缺不全，要想看清中国思想的发展就要摆脱现在中国哲学的研究范式，回到原初的状态，在原有的系统内来思考是什么，不仅是中国的哲学，中国的史学等等都面临一个重新再出发的状态，我觉得建辉兄的二百年史观对我们重新认识中国与东亚的关系有十分积极的作用，给我们很多启发，所以我感觉很感谢他今天的演讲，谢谢大家。

指定讨论

3

王成（清华大学外语系教授）

我是清华大学外文系的王成，我之前是日语专业的，但现在改名叫东亚语言文学了。今天能再次聆听刘建辉教授的演讲感到十分的感谢。其实我在之前读过刘建辉教授的这本书，今天边听的时候便咀嚼脑中的记忆，又有了很多新的体验也学到了很多。我觉得刘建辉教授的的中日二百年史观具有十分重要的

现实意义，对我们这些进行日本研究或东亚研究的学子们很多方法上的启示，我个人也有很大的收获。

我突然想到村上春树有一本书《当我谈跑步时我谈些什么》，讲他跑步的时候在想什么，我们在谈论东亚的时候一直在思考何为东亚，以及我们和东亚的关系，看了建辉教授的这本书以后，无论是在学术结构还是在现实意义上，我对东亚的认识又有了重新思考。

从个人的角度讲，我是做日本近代文学的，他所用的方法对以前不能解释或很难解释的一些问题重新进行了解释并且发现一些问题，产生了一些新认识。

东亚近代文化圈听起来似乎是一个比较老套的概念，但仔细想想，我们在谈论东亚文化圈时究竟在谈论什么，所以在这种层面上如何重新全面的检讨是重新认识这个问题的关键。

关于新的研究方法，他用了非常大的野心式的解构和重构的做法，在这个过程中对范式的重新检讨不是单纯从理论上去建构，而是从个案的角度解释与认识，从中可以看出他对传统研究方法的反思。

比如说，就“文化交流”这个概念，刘教授也有了新的解释。他在开始说“我为什么也要做这个研究是因为相互之间文化交流中存在相互不理解的状态”，从学理上给出了很好的解释，比如说我刚才提到的教养体系的转换问题，其实我们在讨论东亚的文化圈中何为文化，从教养体系的层面去认识或者重新认识时，我们的教养体系在近代化过程中被西方的教养体系重新洗牌、吸收了，所以我们要回到一个脉络上，但究竟如何理顺其中错综复杂的关系？这方面刘建辉教授做得令人叹服，东方主义、一国史观、媒介的研究和作为方法的亚洲、中国或日本，这些在前二十年曾经研究过的问题以及作为一个整体的研究方法不知在何时消失了。

刘教授的重新提出使我们再次想起了这个研究方法。为什么会忘却这个重要问题呢？这与讨论东亚时，我们必须解决什么问题，到底是以日本解释东亚还是以中国解释东亚或是中日关系中的东亚等都是有关联的，刘教授为我们提出了很好的范式。他分析了在近代化过程中，接受西方文明过程中，东亚文化的变迁是如何完成的。这一点扩大了我的视野，使我的问题意识有了很大的飞跃。

比如说我最近在读夏目漱石的作品，其实在明治三、四十年代，关于文学的概念就有许多讨论。夏目漱石感到非常苦闷，在他刚刚进入朝日新闻社时写了第一部小说《虞美人草》，他当时面临的问题就是日本的文学如何用近代的方法来写，他首先苦闷于汉文文学与 literature 的文学的不同，这样他在写作《虞美人草》时大量运用了《文选》《论语》和《离骚》等汉文经典，把汉文经典放到这些小说的描写当中，产生了新的文体，但是在现在文学研究中很多学者认为这是一部失败的小说，也就是说日本在现代化过程中，夏目漱石所代表的日本文学的现代性是失败的，它的代表就是《虞美人草》文体的失败。我认为他们就没有理解夏目漱石对近代新文体的创新实践，所以今天我们从大的层

面和建辉教授所提到的教养体系的层面，去解读汉文脉的在东方文化在近代化的作用，再来看《虞美人草》的时候，就会清晰地看到在日本近代文学的进程中是非常具有实践性的著作，这些问题通过建辉老师提供的方法和范式打开我们的视野。由于时间的关系就说这么多，谢谢大家。

提问

董炳月（中国社会科学院文学研究所教授）

今天雪很大，一开始犹豫是不是要来，听了刘建辉老师的讲演以后感觉幸亏来了，引发了我很多的思考。这个问题非常的厚重，他把时间往前推了，动摇了之前的许多固定说法，因此我想很有必要再对日本的明治时代进行探讨。首先是日本名词，因为在上世纪之交时，日本名词的争论很大，现在感觉这个问题很大。

还有一个是和文汉读法，当时给出一个前提，认为先有汉文和读，后有和文汉读，所以这个逻辑就变了。

另外他提周作人的例子时讲得非常好，他讲的“人”这个概念需要重视，这个我可以提供一些材料。当时成立了两个文学社，一个是日本成立的“创造社”，一个是北京成立的“文学研究会”，文学研究会的发起的宣言是周作人写的，里面用的词基本上来自武者小路实笃。

还有鲁迅在日本留学时写过一篇文章叫《人之历史》，但起先这个题目叫《人间之历史》，人间就是日本汉字，由此可以看到周氏兄弟的人的概念就是从日本来的。

还有一个我看张家口的时候吓了我一跳，里面突然出现了一个大学眼药的广告，我们知道英国的斯坦因、瑞典的斯文赫定和俄国的普尔热瓦斯基，但是对日本的大谷光瑞探险队的3次探险知道的并不多。第一次从欧洲出发，第二次从日本出发，第三次则是从张家口出发。实际上他从1902到1914年，探险的时间最长，规模最大，一个名叫野村荣三郎写的《蒙古新疆旅行日记》，里面就提到了张家口，也提到了大学眼药。当时为了做大学眼药的注释，我查了很多的书，说明日本药品已经渗透到张家口，而且日本媒体在张家口有一个站点，这儿就涉及到明治时期的日本如何给张家口定位的。还有很多问题，我找机会再和刘教授请教，谢谢。

回答

刘建辉

谢谢各位老师提的问题，我就几个问题简单的回应一下。第一个是王京老师的问题，有关殖民地近代的理解，王老师认为在帝国的扩散中启蒙的东西，建筑的东西等等有其他的力量在里面，这是当然。我们说近代本来是侵略与启

蒙的结合体，我为什么要这么做呢，因为我们过去太强调侵略了，而忽视了文化启蒙，但这本身就是一个结合体，他的侵略就是启蒙，启蒙就是侵略，这样殖民地的近代就是一个很难说明的问题，这就是症结所在。

刘晓峰老师提出一个很大的问题，就是要用我们的知识体系来还原解释、说明自身，但这是很困难的，因为一个人一旦觉醒了，你想回去就非常难了，这正是我们的一个苦恼，因为我们已经受了西方的影响，当我们想回去还原的时候，可能无法回到五六百年前的那个知识体系了。

王成老师提了一个很好的问题，就是如何解释夏目漱石的文体。其实这是那个时代脉络下既有反抗又有吸收的一个过程，我觉得他是在解构自己的文体和当时明治小说的文体，先使用了一个将被抛弃的汉文的方法，我觉得您说的非常好。

还有吉川先生的问题我没有解答，因为中日两国整个教养体系已经被割裂了。其实是我们放弃了文化的力量，虽然七十年间我们搞了很多的文化交流，但是我们看到今天的结果，其实这个努力显得非常的苍白，从政治军事和文化角度看，日本真正的脱亚入欧是在战后而非明治时期，在这个时期被美国化了。只有研究好这段历史，才能修复教养的断层。双方都要正视历史，找一个双方能共同看待历史的结合点，才有和解的可能。

还有董老师关于张家口的问题，我们可以私下讨论，关于张家口我们几个老师都在研究，现在有海上到亚洲大陆一个大的循环，这个大循环又经过了日本，张家口曾处于这样一种观察视角当中。过去我们忽视了这个文明上的走向，我们一直在研究如何看待蒙古的问题，大家也都认可我们东亚是汉字文化圈，但蒙古受到了汉字文化圈和欧洲的双重影响。设定一个框架，把内蒙和外蒙带进去进行深入研究，这是我们应该继续思考的问题。时间问题，我就说到这里。

+++

王中忱：今天因为下大雪，所以会议延后了，在场的各位热心参与到会议的最后一刻，非常感谢。虽然也许看不到夜景，但明天我们还能欣赏美丽的雪景。瑞雪兆丰年，衷心祝愿各位工作进步。今天的会议到此结束。



讲演者简历

■ 刘建辉 Liu Jianhui

国际日本文化中心教授

1961年 出生于中国辽宁省

1982年 辽宁大学外语系日语专业毕业

1983年 赴日留学，就读于神户大学文学部

1990年 神户大学大学院文化学研究科博士课程毕业，获文学博士学位

1990年～1999年 先后执教于南开大学外文系，北京大学比较文学研究所

1999年 转入日本/国际日本文化研究中心，任副教授，教授专业为中日比较文学/比较文化

主要著作有：《增补/魔都上海——日本知识人的“近代”体验》（2010），
《日中二百年——相互支撑的近代》（2012）

代后记

北京会议总结

孙建军 (北京大学日语系副教授)

此次论坛于 11 月 22 日在北京大学外国语学院新楼 5 层会议室召开，适逢周日且天降大雪，但现场仍有 50 余位参会者的身影，讨论气氛热烈高涨。

下午三点论坛正式开始，首先由特别嘉宾——北京大学元培学院院长孙华致辞，孙院长谈到“在人才培养过程中有必要使其建立起兼具国际性与跨学科性的综合性视角”的观点与 SGRA 的宗旨完全一致。随后，国际交流基金北京日本文化中心所长吉川竹二以“镜”为例，富有启发性地谈及了文化交流的重要性。

之后，刘建辉教授配以幻灯片为现场听众带来了题为“日中二百年——从文化史出发再次探讨”的演讲。刘教授提到，“在讨论东亚史时，许多学者都会从对比古代的交流史当中突出强调近代的战争史，并且试图寻找二者之间的分界点。然而，如果仔细寻找这个时期三国之间文化交流与来往的足迹就会发现其丰富程度远超先前。而且很多情况下三国都会视西方为‘他者’，通过利用借鉴彼此的成果、经验和教训促进自身对于西方文化、文明的吸收与容纳。因此，可以确定东亚尤其是中日韩三国在此期间形成了一个不同于先前的近代文化圈，这一文化圈的中心思想是接受西方。”

刘教授在研究中围绕“相互支撑”这一关键词，打破了以往仅限于基督教、殖民地、城市史、文学、经济等某个领域研究的固有模式，尝试了跨领域的研究方法，从而使人们看待中日关系时能够跳出国家视野范围，立足于 200 年间的历史，遍观西洋化潮流之中两国的应对与互补。可以说两国在近代化过程之中都是通过与邻国（对日本而言是中、韩，对中国而言是日本）的关系建立起自我认知。在研究汉文的近代发展、新汉字词的产生、近代文学家的足迹、近代思想的发祥与传播等课题时都可以看到其中留有浓厚的两国“相互支撑”的色彩，这一点可以得到确证。

在演讲的后半部分，刘教授通过当时的近代国际性都市“张家口”详细例证了两国间的“相互支撑”，其分析兼具敏锐的洞察与渊博的学识，吸引了会场所有听众的高度关注。

短暂休息之后是学者点评。由清华大学中文系教授王中忱主持，王教授也



是本论坛共同举办方、清华东亚文化讲座的负责人。北京大学日本语言文化系副教授王京、清华大学历史系教授刘晓峰以及同校日本语言文化教研室的王成教授先后进行了点评。

尽管当天气象部门发布了大雪警报，但是刘建辉教授的精彩演讲在参会者中引起了热烈反响。演讲的调查表中，大家表示“听了刘教授从多角度对中日间 200 年进行的分析，加深了自身对于历史的理解。”“最重要的是学会了一些发现问题的方法。”“久违的好奇心被激发而出，想要更加深入地学习研究”。

12 月的北京少晴多霾，目前尚未找到解决严重空气问题的良策，人们大都是任它“随风而去”。当天刘教授演讲中提到的张家口令人印象深刻并引起深思。除西北面以外，北京基本上属于盆地，冬天只有刮西北风才能天晴，否则污浊的空气只能聚集于此。而张家口正好地处这一西北通风口，因此其重工业的发展一直以来受到了相应的限制。也就是说张家口对北京市的空气改善发挥了重要作用。70 年前的张家口城市文化或许对北京的空气改善是不是也会有所贡献呢？

■ 孙建军 Sun Jianjun

生于 1969 年。1990 年毕业于北京国际关系学院，1993 年硕士毕业于北京日本学研究中心，2003 年于国际基督教大学取得博士学位。先后于北京语言大学、国际日本文化研究中心任讲师，现为北京大学日本语言文化系副教授，同时兼任南京大学亚太发展研究中心客座研究员、北京第二外国语学院客座教授。研究领域为近代中日词汇交流史、日语语言学。专著有《近代日语的起源-幕末明治初期创制的新汉语词汇》（日文、早稻田大学出版社、2015 年）。

代后记

呼和浩特会议报告

娜荷芽 (内蒙古大学蒙古历史学系副教授)

由渥美国际交流财团关口国际研究会主办的第 9 次 SGRA 呼和浩特论坛“日中两百年：以文化史视点为中心”，于 2015 年 11 月 20 日在中国内蒙古自治区呼和浩特市的内蒙古大学召开。这是 SGRA 中国论坛自 2010 年、2011 年以来，第三次在呼和浩特市举办。前两次在内蒙古大学蒙古学研究中心召开的论坛，为内蒙古大学的青年学子认识并了解渥美财团的事业及其中国论坛提供了重要的场所，开启了一个良好的开端。本次论坛（即第 9 次 SGRA 呼和浩特论坛）是在国际交流基金北京日本文化中心的协助下，由内蒙古大学蒙古历史学系、清华大学东亚文化论坛和北京大学日本语言文化系共同举办的。这次会议主题主要是以刘建辉教授（国际日本文化研究中心）所作的报告“日中两百年：以文化史视点为中心”为主题展开的。

开幕式于下午 3 点开始，会议主持人是宝音德力根教授（内蒙古大学）。首先由主办方的苏德毕力格教授（内蒙古大学）致欢迎辞。接下来渥美财团常务理事今西淳子女士介绍了渥美财团以及 SGRA、中国论坛的历史发展沿革。稍后王中忱教授（清华大学）、周太平教授（内蒙古大学）和孙建军副教授（北京大学）都分别致了欢迎辞。致辞环节结束后，刘建辉教授开始了他的主题讲座。

刘教授的讲座内容主要有 4 个部分。第一，前近代和近代东亚文化圈的异同；第二，相互交融的中日近代文化；第三，从过去、现在到未来：“东亚文化圈”再次构建的可能性与课题；第四，使用 PPT 展示并解说了大量有关近代东亚和张家口的珍贵照片和数据。日本和中国的近代史研究在东亚地区尚有众多尚未涉足的领域。不仅有不幸和悲剧，不应忽视的还有基于相互交流而产生的事例及种种文化现象。该讲座正是从相互交融这一新的视点，对日中关系进行了详细而又具体的论述，进而与内蒙古大学的青年学子们所进行的深入探讨也具有十分重要的意义。

尤其是张家口在历史上既是中、蒙、俄进行贸易的交通枢纽，又是划分蒙汉两民族“边界”的关口。这里原本是与日本毫无直接关系的“周边”地带，然而在大正、昭和年间，由于日中两国军事对抗和经济实力的变化，一

时被称为“蒙疆”，并且使得该地区成为同“满洲”和上海相并列的，虽然不是日本但却与日本人关系密切的地区之一。作为“日本关联在外资料的调查研究”项目计划的一环，刘建辉教授在张家口进行了实地调查和资料收集，其缜密而详细的研究方法得到了极高的评价，期待今后进行更加深入的学术交流。

讲座结束后进行了答疑，围绕主题展开了活跃的讨论，其他与会者也对相关问题进行了讨论和补充说明。最后，致会议闭幕词，会议于5点钟准时结束。与会者除了内蒙古大学蒙古历史学系和内蒙古大学蒙古学研究中心的学者们之外，还包括内蒙古大学的本科生、研究生、日本留学生和其他大学的出席者等百余人。

■ 娜荷芽 NAHEYA

2012年取得东京大学综合文化研究科博士学位。内蒙古大学学士、东京外国语大学硕士。2011年年度渥美奖授奖学生。曾任教于武藏大学、和光大学，2012年担任内蒙古大学蒙古历史学系讲师、副教授。SGRA研究员。



SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・ブートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行

-
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉裕、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャンナ・ムコパディヤヤ、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート37 第1回チャイナ・フォーラムin 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行

- SGRA レポート 38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャヤー・ムシカシントン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島藺進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャンナ・ムコパディヤヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、プ・ティ・ミン・チイ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～
TABLE FOR TWO～」 近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート 54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム チュン キャット
金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行

- SGRA レポート 55 第38回フォーラム講演録「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル～」木村建一、高 偉俊、Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録「中国の環境問題と日中民間協力」第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39回フォーラム講演録「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島 蘭 進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート 59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム チャン キヤット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」柳田耕一 「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉 2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュン・キヤット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭 2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」（日本語・中国語・英語）宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行

- SGRA レポート71 第47回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会－福島第一原発事故から考える科学技術と倫理－」崔勝媛、島蘭進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート72 第8回 チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート73 第14回 日韓アジア未来フォーラム、第48回 SGRA フォーラム講演録「アジア経済のダイナミズム－物流を中心に」李鎮奎、金雄熙、榎原英資、安秉民、ドマンホーン、李鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート74 第49回 SGRA フォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」劉傑、平野健一郎、南基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート75 第50回 SGRA フォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」神崎智子、斉藤淳子、李允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート76 第9回 SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中二百年－文化史からの再検討」劉建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート77 第15回 日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力－共進化アーキテクチャの模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート78 第51回 SGRA フォーラム講演録「今、再び平和について－平和のための東アジア知識人連帯を考える－」南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均營、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート79 第52回 SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」劉傑、趙珧、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ 2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート80 第16回 日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力－新たなアジア型モデルの模索－」金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート81 第56回 SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボット－人とロボットの共生社会をめざして第2回－」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート82 第57回 SGRA フォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性－蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニバートル、向正樹、孫衛国、金甫枕、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート83 第58回 SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一帯一路』の地政学」朱建榮、李彦銘、朴榮濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート84 第11回 SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本磨充、呉孟晋 2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート85 第17回 日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」孫赫相、朱建榮、文昊鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート86 第59回 SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世紀東アジアの国際関係－戦乱から安定へ－」三谷博、劉傑、趙珧、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行

- SGRA レポート 87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート 88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 発行予定
- SGRA レポート 89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? ——不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel : 03-3943-7612 Email : sgra-office@aisf.or.jp) へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0076

第9回SGRAチャイナ・フォーラム

日中200年 文化史からの再検討
中日200年 从文化史进行再探讨

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日 2020年6月18日
発行責任者 今西淳子
監修者 孫 建軍
日本語版翻訳 陳 璐
印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。

SGRA REPORT

SGRAレポート

NO. 76

第9回 SGRAチャイナ・フォーラム

日中2000年——文化史からの再検討

